厚沢部町教育委員会発掘調査報告書　第８集

史跡松前氏城跡　福山城跡　館城跡

館 城 跡 Ⅵ

－平成21年度町内遺跡発掘調査事業に伴う発掘調査報告書－

平成22年３月

北海道厚沢部町教育委員会

序　文

北海道南西部に位置する厚沢部町は、人口５千人に満たない小さな町ではありますが、川と森に囲まれた自然豊かな町であります。まちの８割以上を森林が占め、ヒノキアスナロやゴヨウマツの北限であり、トドマツの南限でもあります。多様な樹種で構成される森林は、多様な野生生物を育み、厚沢部町独特の豊かな自然景観を創りあげました。私たちの先人も、厚沢部の豊かな森とともに暮らし、その伝統や文化を築き上げてきました。このたび発掘調査を実施いたしました館城跡も、そのような町の貴重な文化財の一つであります。

館城跡は、明治元年、松前藩によって蝦夷地経営の新たな拠点として築かれましたが、築城開始からわずか２ヶ月半という短期間で、旧幕府軍の攻撃を受け落城し、その後、再建されることなく現在に至っております。今では、わずかに土塁や堀、礎石、井戸跡が、当時の面影をとどめるのみとなっています。

現在の館城跡は、「館城跡公園」として町民に親しまれており、毎年５月上旬には「館城跡まつり」が開催され、多くの町民が心待ちにする恒例の行事となっています。また、幕末から維新期にかけての北海道の大きな変革期を象徴する遺跡として、学術的にも高く評価されております。

昭和41年に北海道の指定史跡となり、さらに平成14年に国の史跡に指定されました。

平成17年から史跡の概要を把握するために発掘調査を継続して実施しており、また、平成18年度には保存管理計画を策定し、史跡の保存管理に努めているところであります。

今後は、館城跡のより積極的な公開・活用を図っていくために、本格的な保存整備事業を実施する予定です。

今年度の発掘調査では、館城跡北西部の堀・柵列の所在を確認するために、史跡外を含めた範囲内容確認調査を行いました。また、平成20年度に引き続き、館城跡北東部に位置する「伝米倉跡」周辺の調査を行い、館城跡北東部の外郭線の所在を明らかにすることができました。さらに、地表面における礎石配置確認・測量調査を行い、当初の予想を上回る247基の礎石を検出し、これらの建物の一棟が文献記録と極めてよく一致することが確認されました。これらの成果が館城跡の保存整備に活用されるのみならず、調査研究における基礎資料となることを期待いたします。

最後になりますが、本事業の実施に際しまして、文化庁、北海道教育委員会をはじめとする諸機関・各氏から、多くのご指導・ご助言をいただきましたことを深く感謝申し上げます。

平成22年３月

厚沢部町教育委員会
教育長　中　井　文　夫

例言

1．本書は、厚沢部町が国庫補助（埋蔵文化財緊急調査費）を受けて、平成21年度に実施した「町内遺跡発掘調査等」事業における埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
2．遺跡の地番は北海道檜山郡厚沢部町字城丘158ほかである。
3．本書の編集は石井淳平（厚沢部町教育委員会事務局社会教育係主事・学芸員）が担当した。
4．文責者は、特に記した者以外は石井淳平である。
5．現場及び遺物の写真撮影は石井淳平が担当した。
6．陶磁器の鑑定は、石井淳平が行った。
7．陶磁器の実測・トレース及び遺構図面等のトレースは安達優子が行った。
8．細部地形レーザー計測及び礎石のトータルステーション計測・図化は株式会社シン技術コンサルに委託した。
9．火山灰同定及び花粉分析はパレオ・ラボ株式会社に委託した。
10．出土資料は厚沢部町教育委員会が保管する。
11．調査にあたっては、「館城跡調査検討委員会」を組織し、指導を受けながら調査を実施した。

委　員　長　　藤沼邦彦（元弘前大学人文学部教授）
副委員長　　後藤元一（後藤環境デザイン研究室）
委　　員　　久保　泰（松前城郷土資料館館長）
　　佐藤永吉（館観光促進会会長）
　　千田嘉博（奈良大学文学部教授）
指導・助言　　佐藤正知（文化庁文化財部記念物課）
　　田才雅彦（北海道教育庁文化・スポーツ課文化財調査グループ）

12．調査にあたっては、下記の方々及び機関のご協力、ご助言をいただいた。
伊勢谷久夫、内田和伸（文化庁文化財部記念物課）、大萱昭芳、大橋康二（佐賀県立九州陶磁文化館）、小泉雅弘（駒沢大学文学部）、笹森泰子、佐藤雄生・前田正憲（松前町教育委員会）、関根達人（弘前大学人文学部）、高田徹、竹原伸二（枚方市教育委員会）、只野みさほ、只野久美子、塚田直哉（上ノ国町教育委員会）、中井均、中野雄二（波佐見町教育委員会）、野上健紀（有田町歴史民俗資料館）、藤森静子、山崎香、渡辺愛子

記号等の説明

1．実測図等の縮尺は原則として以下の通りとし、全てスケールを付して図中に標示する。
　遺構図　40分の１、陶磁器・金属製品　　３分の１
2．実測図中の方位は真北を示す。
3．土層等の色調、含有物の混在状況（面積比率）については、『新版　標準土色帖』（1996年版）に基づき表記した。

目次

序文
例言
記号等の説明

＜本文目次＞

Ⅰ章　調査の概要…… 1
1．調査要項…… 1
2．調査体制…… 1
3．調査に至る経緯…… 1
4．調査結果の概要…… 3
5．調査の経過…… 3
（1）調査準備等 …… 3
（2）現地調査 …… 3
（3）整理作業 …… 4
Ⅱ章　遺跡の位置と環境…… 7
1．地理的環境…… 7
（1）位置と地形 …… 7
（2）地質 …… 7
（3）館城跡関連遺跡 …… 7
2．館城築城とその経緯…… 8
（1）13代藩主崇広の死去と徳広の藩主就任 8
（2）正義隊のクーデター …… 8
（3）館城の築城 …… 8
Ⅲ章　調査の方法…… 13
1．発掘調査基線…… 13
2．調査の方法…… 13
（1）掘削 …… 13
（2）現地測量 …… 14
（3）細部地形レーザー計測 …… 14
（4）礎石トータルステーション計測 …… 14
（5）写真記録 …… 14
（6）1次整理 …… 14
（7）2次整理 …… 14
（8）保管 …… 15
3．基本層序…… 15
Ⅳ章　遺構と出土遺物…… 17
1．第1調査区…… 17
（1）調査区の概要 …… 17
（2）メイン調査区 …… 17
（3）サブトレンチ1 …… 17
（4）サブトレンチ2 …… 17
（5）サブトレンチ3 …… 17
（6）サブトレンチ4 …… 18
（7）サブトレンチ5 …… 18
（8）サブトレンチ6 …… 18
2．第2調査区…… 26
（1）調査区の概要 …… 26
（2）2−1調査区 …… 26
（3）2−2調査区 …… 26
3．第3調査区…… 31
（1）調査区の概要 …… 31
（2）「溝状遺構」…… 31
（3）整地層 …… 31
（4）「沢状地形」…… 31
4．第4調査区…… 38
（1）調査区の概要 …… 38
（2）平成20年度西側調査区 …… 38
（3）平成20・21年度柵列…… 38
5．第5調査区…… 45
（1）調査区の概要 …… 45
（2）礎石建物の概要 …… 45
（3）「米倉建物」…… 45
（4）「本丸建物1」…… 45
（5）「本丸建物2」…… 45
（6）『増田家文書』「館築城圖」との比較 … 46
6．遺構出土遺物及び包含層出土遺物…… 52
（1）第4調査区平成20年度出土遺物 …… 52
（2）第2調査区出土遺物 …… 52
（3）第3調査区出土遺物 …… 52

（4）第４調査区平成21年度出土遺物 …… 52
（5）第５調査区「米倉建物」採集遺物 … 52
（6）第５調査区「本丸建物」採集遺物 … 52
Ⅴ章　自然科学的分析…… 59
1．厚沢部町館城跡のテフラ分析…… 59
2．厚沢部町館城跡の花粉分析…… 62
Ⅵ章　調査のまとめ…… 67
1．史跡外西側の堀・柵列 …… 67
2．北辺の堀・柵列の所在 …… 67
3．北東部の柵列・整地層 …… 68
4．南西部の堀・土塁・柵列 …… 68
5．礎石建物跡…… 68
（1）「米倉建物」…… 68
（2）「本丸建物」…… 69
参考文献…… 70

＜挿図目次＞

Ⅰ章
図1　館城跡遺構・調査区配置図…… 6
Ⅱ章
図2　厚沢部町の位置と館城跡関連遺跡… 10
図3　館城跡の位置と周辺の地形…… 11
図4　指定地周辺の地形と指定範囲…… 12
Ⅲ章
図5　グリッドの呼称方法…… 13
図6　基本層序模式図…… 15
Ⅳ章
図7　第１調査区遺構配置図…… 19
図8　第１調査区サブトレンチ１…… 20
図9　第１調査区サブトレンチ２…… 21
図10　第１調査区サブトレンチ３…… 22
図11　第１調査区サブトレンチ４…… 23
図12　第１調査区サブトレンチ５…… 24
図13　第１調査区サブトレンチ６…… 25
図14　2－1調査区遺構配置図 …… 27
図15　2－1調査区西壁断面図 …… 28
図16　2－2調査区遺構配置図 …… 29
図17　2－2調査区西壁断面図 …… 30
図18　第３調査区全体遺構配置図…… 33
図19　第３調査区遺構配置図…… 34
図20　平成20・21年度第３調査区３次元現況地形図…… 35
図21　平成21年度第３調査区３次元現況地形図（北西から） …… 36
図22　平成21年度第３調査区３次元現況地形図（南東から） …… 36
図23　第３調査区沢状地形エレベーション図及び溝状遺構・整地層断面…… 37
図24　第４調査区全体遺構配置図…… 39
図25　第4調査区平成20年度西側調査区平面図 40
図26　第４調査区柵列平面図（1）…… 41
図27　第４調査区柵列平面図（2）…… 42
図28　第４調査区柵列平面図（3）…… 43
図29　第４調査区柵列平面図（4）…… 44
図30　第５調査区礎石建物配置全体図…… 47
図31　第５調査区「米倉建物」平面図…… 48
図32　第５調査区「本丸建物１」平面図… 49
図33　第５調査区「本丸建物２」平面図… 50
図34　第５調査区礎石建物『増田家文書』「館築城圖」との比較 …… 51
図35　第１調査区～第４調査区出土遺物… 53
図36　第５調査区「米倉建物」採集遺物… 54
図37　第５調査区「本丸建物」採集遺物… 55

＜表目次＞

表1　館城跡発掘調査の経過…… 2
表2　平成21年度調査の概要…… 3
表3　平成21年度館城跡発掘調査基準杭と座標 13
表4　掲載遺物一覧（陶磁器）…… 56
表5　掲載遺物一覧（金属製品）…… 57
表6　平成21年度出土遺物集計表 …… 58

＜写真図版目次＞

写真図版１…… 75
　写真１　『増田家文書』「館築城圖」
写真図版２…… 76
　写真２　第１調査区全景（南から）
　写真３　第１調査区サブトレンチ１堀断面
写真図版３…… 77
　写真４　第1調査区サブトレンチ5（南西から）
　写真５　第１調査区サブトレンチ５堀断面
　　旧用水路検出（南から）
写真図版４…… 78
　写真６　２－１調査区全景（東から）
　写真７　２－１調査区全景（西から）
写真図版５…… 79
　写真８　２－２調査区全景（南東から）
　写真９　２－２調査区西壁断面（南東から）
写真図版６…… 80
　写真10　第３調査区全景（南から）
　写真11　第３調査区「沢状地形」（東から）
写真図版７…… 81
　写真12　第３調査区溝状遺構断面（東から）
写真図版８…… 82
　写真13　平成20年度第４調査区堀・土塁・
　　水路（西から）
写真図版９…… 83
　写真14　平成21年度第４調査区全景（北から）
写真図版10…… 84
　写真15　平成21年度第４調査区南側柵列
　　検出状況（北から）
写真図版11 …… 85
　写真16　平成21年度第４調査区堀・土塁・柵
　　列屈曲部（東から）
　写真17　平成20年度第４調査区柵列柱痕断面
　　（南から）
　写真18　平成21年度第４調査区柵列断面
　　（南東から）
写真図版12…… 86
　写真19　第５調査区「米倉建物」礎石検出状
　　況（南から）
　写真20　第５調査区「本丸建物２」礎石検出
　　状況（南東から）
写真図版13…… 87
　写真21　第５調査区「本丸建物１」礎石検出
　　状況（南から）
写真図版14…… 88
　写真22　平成20年度第４調査区出土遺物
　写真23　平成21年度第４調査区出土遺物
　写真24　第3調査区、第4調査区出土金属製品
写真図版15…… 89
　写真25　第５調査区「米倉建物」採集遺物
写真図版16…… 90
　写真26　第５調査区「本丸建物」採集遺物

Ⅰ章　調査の概要

1．調査要項

事 業 名：町内遺跡発掘調査事業
調査主体：厚沢部町教育委員会
調 査 地：北海道檜山郡厚沢部町字城丘120-1、122-1、123-1、160、168-1、168-3、178、179-2、376
調査面積：掘　削　2,317㎡（うち史跡内1,227㎡、史跡外1,090㎡）
　　掘削無　4,550㎡
調査期間：現地調査：平成21年５月11日～平成21年８月28日
　　整理作業：平成21年９月１日～平成22年３月31日

2．調査体制

厚沢部町教育委員会事務局
　教　育　長　朝倉勝春（10月９日まで）
　　中井文夫（10月10日から）
　事 務 局 長　斎藤洋子
　事務局次長　進藤貞治
　社会教育係　石井淳平（発掘担当者）
　社会教育係　三戸康彰
　社会教育係　船瀬洋太
　社会教育係　笠原　健
調査補助員
　安達優子
発掘調査作業員
　天野信一、佐々木真弓、沢野みどり、武田睦子、長尾数利、和田利憲

3．調査にいたる経緯

館城跡は、昭和41年７月７日付北海道教育委員会広報第2945号の告示（北海道教育委員会告示第65号）により、道指定史跡となった。

昭和63年頃から、町では国の史跡指定へ向けての取り組みを進め、昭和63年９月29日～10月13日、平成元年10月２日～11月４日、平成２年10月２日～16日の３ヵ年にかけて、遺構確認調査を行った。この３カ年の調査では、館城跡東部の溝や柵の所在が明らかとなった。これらの成果を受け、平成13年６月25日、史跡松前氏城跡福山城跡の追加指定の申請をし、平成14年９月20日付官報号外第208号で、「史跡松前氏城跡福山城跡館城跡」として国指定の告示（文部科学省告示第183号）がなされた。

平成15年７月に担当職員を配置し、平成17年から２カ年で保存管理計画を策定した。また、平成17年度から、保存管理計画策定に必要な堀・土塁など館城跡の外郭線を構成する遺構及び、「散兵壕跡」の内容確認調査を実施した（厚沢部町教育委員会2007）。平成18年度の調査により、館城跡西辺の堀・柵列の所在を明らかにすることができたが、西辺の堀の北側延長は史跡指定地外の町道（上館城ノ岱

線）下へと延びているため、追跡調査が不可能な状況となった。

このことから、外郭線確認のための発掘調査を継続して実施することとし、平成19年度から21年度までの３カ年の調査を実施した。

平成19年度は、地籍図及び航空写真の分析により、現在確認している西辺の堀のさらに西側に、より大きな区画が存在する可能性が浮上したことから、これまで部分的にしか発掘調査が実施されていなかった館城跡南西部において、堀・柵列の所在確認調査を実施した。当初の予想に反し、西辺の堀の西側により大きな区画が存在する可能性は否定された。

平成20年度は南辺の堀・土塁・柵列の構造及び残存状況の確認（第１調査区113㎡）と北東部の堀・柵列の所在確認（第２調査区1,329㎡）を目的として調査区を設定し、第２調査区では堀・柵列の延長を確認するとともに「伝米倉跡」と呼称した地点では、表土直下から多量の炭化米と広範囲の焼土層、厚さ約50㎝の整地層を検出した。

これらの調査成果に基づき、平成21年度は館城跡西辺及び北辺の外郭線確認（第１調査区、2−1調査区、2−2調査区）、北東部の整地層範囲及び外郭線確認（第３調査区）、南西部の堀・土塁・柵列の構造確認（第４調査区）を行った。また、礎石の地表面検出を行い、測量調査を実施した（第５調査区）。

表１　館城跡発掘調査の経過

年　度	調査地区	面　積（㎡）	調査の目的	調査結果
昭和63～平成２年	南辺土塁地区	2,400	南辺土塁構造確認	
	東辺地区		東辺の堀・柵列の所在確認	堀・柵列の所在を確認
	西辺地区南部		西辺の堀・柵列の所在確認	堀・柵列の所在及びそれらが、さらに北方に延びることを確認
	郭内地区		郭内の建物の所在確認	柱穴列、建物跡を確認
平成17年度	南辺土塁地区	386	南辺土塁構造確認	
	「散兵壕跡」地区		「散兵壕跡」の構造確認	風倒木痕であることを確認
	北辺地区		北辺の堀・柵列の所在確認	所在を確認できず
平成18年度	西辺地区	1,798	西辺の堀・柵列の所在確認	調査区西側へ延びることを確認
平成19年度	南西部地区	397	南辺の堀西側の範囲を確認	当該地区の堀及び柵列の所在が明らかになるとともに、近代の水路等の攪乱との関係が問題となった
平成20年度	南西部地区（第１調査区）	113	南辺の堀・土塁・柵列の構造及び残存状況確認	堀と近代の水路が別の時期に構築されたことが明らかとなった 柵列の柱痕が良好に検出
	北東部地区（第２調査区）	1,329	北辺の堀・柵列の所在確認	館城跡北東部の堀及び柵列の所在を確認 「伝米倉跡」周辺の整地層を確認

4．調査結果の概要（図１）

平成17年から再開された館城跡の発掘調査は、館城跡の外郭線を構成する堀・土塁・柵列の所在確認を目的として実施され、現在、東南二面の堀・柵列についてはほぼその所在が確認されている。しかし、西辺の堀・柵列についてはその北半が、北辺については北東部を除いて、その所在が確認されていない。今年度の調査では、西辺及び北辺の堀・柵列を確認することを主たる目的として調査区を設定した。併せて、館城跡の中心部分（旧町有地　字城丘160、168-1、168-3）において礎石が良好に残存することから、これらの配置状況についてピンポールを用いた地表面確認を行った。

表２　平成21年度調査の概要

年　度	調査地区	面　積（㎡）	調査の目的	調査結果
平成21年度	史跡外西側地区（第１調査区）	1,090	平成18年度に検出した堀・柵列の延長の確認するため、史跡外西側に調査区を設定	町道東側までは堀が所在することを確認したが、町道西側では堀・柵列を確認できなかった。町道道路敷地盛土下で道路拡幅以前の用水路を検出した。堀を踏襲・再利用した可能性もある。
	北辺地区（第２調査区）	788	北辺の堀・柵列の所在確認を目的として町道東側と「伝米倉跡」北西の二カ所に調査区を設定	いずれの調査区でも堀・柵列は確認できなかったが、自然の流路が検出され、これが館城北辺の区画として機能した可能性が高まった。
	北東部地区（第３調査区）	292	「伝米倉跡」西側の整地層及び区画施設の所在確認	平成20年度調査で検出した柵列の延長上で「溝状遺構」を検出した。柱痕を確認することはできなかったが、区画施設の可能性が高い。
	南西部地区（第４調査区）	147	南西部の屈曲部分における堀・土塁・柵列の位置関係の確認	堀・土塁・柵列が良好に残存することを確認した。柵列は堀・土塁と並行して屈曲する。
	郭内地区（第５調査区）	4,550	礎石の残存状況及び建物配置の確認	247基の礎石を検出した。『増田家文書』に記載のある『館城平面図』の建物に類似する5.5間×27間の配列が確認された。「奥御殿」に相当する建物である可能性が想定される。また、「伝米倉跡」南側では５間×13間の礎石配列を確認した。

＊なお、館城跡南西部の調査を実施した平成20年度第１調査区については、平成21年度第４調査区とあわせて今回報告を行う。

5．調査の経過

（１）調査準備等

２月12日　平成21年度国宝重要文化財等保存整備費補助金交付申請書提出
２月13日　現状変更許可申請書提出
３月13日　第１調査区（字城丘）に係る農地転用許可申請書提出
４月１日　21庁財第8001号により国宝重要文化財等保存整備費補助金交付決定
４月17日　20委庁財第４の2072号により現状変更許可
４月30日　厚農委第22号指令により農地転用許可

（２）現地調査

５月11日　発掘作業員雇用契約の締結、借上げ車両・借上げ仮設ハウス納品、第１調査区予定

地賃貸借契約締結、第１調査区基準杭打設作業開始、第１調査区表土掘削作業開始

5月13日　作業員契約事務及び業務説明、環境整備、第１調査区残土処理

5月20日　第１調査区サブトレンチ掘削作業開始（サブトレンチ１から順次作業開始）

5月27日　第１調査区サブトレンチ埋戻し作業開始

5月29日　第１調査区調査終了、第４調査区表土掘削作業開始、第２調査区基準杭打設

6月８日　第４調査区柵列柱痕検出作業開始

6月10日　第２調査区表土掘削作業開始、第５調査区礎石検出作業一部着手

6月14日　明治維新学会巡検（駒沢大学文学部教授小泉雅弘氏ほか37名来現場）

6月16日　２－１調査区残土除去作業開始

6月19日　第４調査区調査完了

6月25日　２－２調査区流路検出

7月２日　第１調査区埋戻し作業完了

7月７日　２－１調査区調査完了

7月９日　第３調査区表土掘削作業開始

7月15日　厚沢部町女性交流協議会会員20名、七飯町歴史館友の会会員20名来現場

7月21日　第３調査区遺構検出作業開始

7月26日　発掘調査現地説明会開催（参加者21名）

7月28日　奈良大学文学部教授千田嘉博氏（館城跡調査検討委員会）現地指導

7月29日　第１回館城跡調査検討委員会現地視察、町民向けミニパネルディスカッション開催

7月30日　第１回館城跡調査検討委員会会議、第４調査区埋戻し作業開始

8月４日　第３調査区細部地形レーザー計測作業開始

8月５日　第５調査区「本丸建物」周辺礎石検出作業完了

8月７日　第５調査区「米倉建物」周辺礎石検出作業完了、礎石トータルステーション計測作業開始

8月11日　第３調査区埋戻し作業開始

8月12日　礎石トータルステーション計測作業終了

8月14日　第３調査区埋戻し作業完了、調査機材洗浄搬出等現場撤収作業完了、補助員を除く作業員雇用契約期間満了

（３）整理作業

8月17日　整理作業開始

8月26日　遺物実測・トレース作業開始

8月27日　第２調査区埋戻し作業完了

8月28日　現状変更終了報告提出

9月11日　文化庁文化財部記念物課佐藤正知主任調査官来町・現地指導

9月18日　遺物実測・トレース作業完了、遺物図版作成開始

9月25日　遺構図面トレース・図版作成作業開始

9月26日　文化庁文化財部記念物課内田和伸主任調査官来町・現地指導

9月29日　調査補助員雇用契約期間満了

10月８日　平成21年度館城跡発掘調査成果展開始（図書館ロビー・館地域振興センター、館小学校、館中学校巡回展示）

10月22日　第２回館城跡調査検討委員会現地視察・会議
10月23日　第２回館城跡調査検討委員会関連史跡視察（上ノ国町洲崎館跡、松前町福山城跡）
11月16日　平成21年度調査に係る事務連絡及び平成22年度事業ヒヤリング（北海道教育庁別館９階）
11月20日　デザイン文化研究室代表大堂昭芳氏来町・現地指導

平成２２年

１月13日　国宝重要文化財等保存整備費補助金計画変更承認申請書提出
２月５日　発掘調査報告書原稿入稿
３月14日　平成21年度館城跡発掘調査成果報告会開催
３月31日　発掘調査報告書刊行

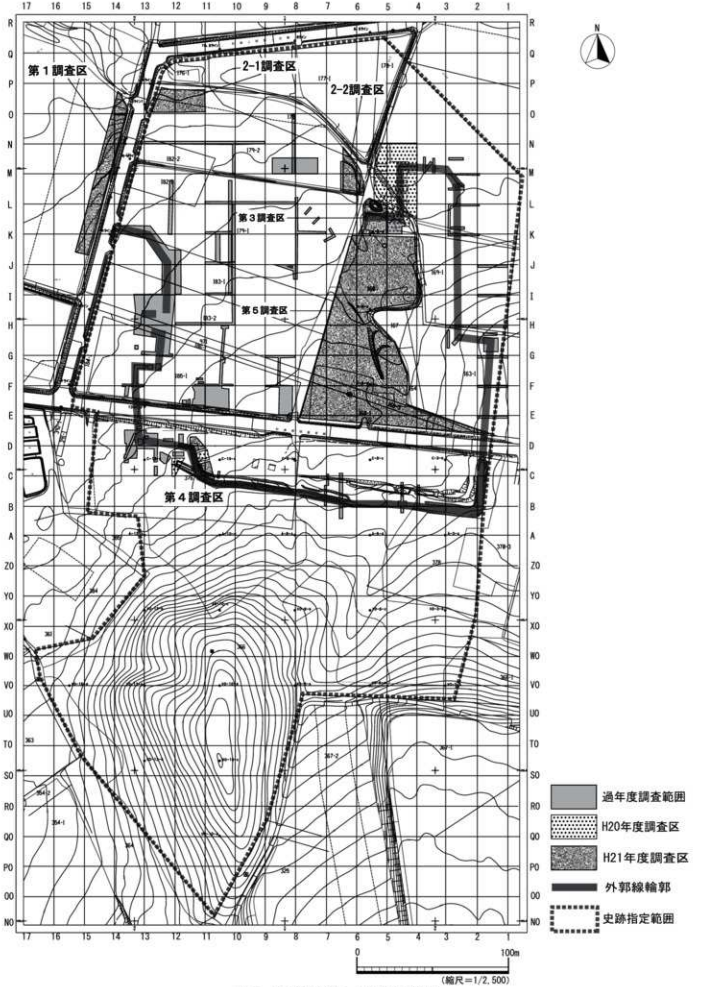


図１　館城跡遺構・調査区配置図

Ⅱ章　遺跡の位置と環境

1．地理的環境

（1）位置と地形（図2～4）

厚沢部町は、北海道南西部渡島半島に所在し、北緯41°47′～42°03′、東経140°09′～140°28′に位置する。江差町、上ノ国町、木古内町、北斗市、森町、八雲町、乙部町と界を接し、町域は厚沢部川とその支流である安野呂川、鶉川の三河川の流域にまたがり、総面積は460.42㎢、東西約29㎞、南北約27㎞の広がりをもつ。

館城の所在する館地区（厚沢部町字新栄、字当路、字中館、館町、南館町、字城丘、字富里の総称で旧大字館村にほぼ一致する地域）は、東側を日本海と太平洋との分水嶺を形成する山塊、南側及び西側を梯子山、幌内岳、五郎助岳などの標高500m級の山々、北側を字中館のなだらかな丘陵地帯に囲まれた盆地である（図3）。盆地の規模は、古佐内川と厚沢部川の合流点付近の地峡から佐助沢、泉沢の合流地点までの東西約9㎞、南館の市街地から館町市街地までは南北約1.5㎞である。

館城跡は、厚沢部川左岸の盆地の南西、厚沢部川とその支流である糠野川の合流地点から東へ約1㎞に位置する。南方から延びる舌状台地上に立地し、遺跡周辺は南から北に向かって緩やかに傾斜する。遺跡の標高は約50mで、糠野川に面した平坦面からの比高差は約20mである。遺跡の北、西、東は開け、南は比高差約30mの小丘陵（通称「丸山」）となっている。

（2）地質

館地区の地質は、新第三紀に形成された厚沢部層、館層、鶉層などのシルト岩や砂岩によって形成され、さらに、これらの基盤として、古生代の松前層群と中生代の上磯層群がある。新第三紀中新世前期には、グリーン・タフ変動に伴う火山活動により福山層の堆積があり、中新世中期の大規模な海進により、檜山層群が堆積する。厚沢部層の時期に現在の向斜軸（館城跡、鶉町市街地の東側をとおり、南北方向に延びるライン）より東側の沈降に伴って、多量の堆積物が形成された。

館盆地の中央部分では軟質の館層が広く分布することから、河川の浸食の影響を強く受け、広く開析された低平地が形成されている。字新栄から館町市街地にかけては、1段の河成段丘が形成され、現河床から約45～55mの比高差をもつ。段丘堆積物は、松前層群からの供給によるチャート・砂岩・粘板岩などの礫で構成される。館町、字当路、字新栄では沖積平地が発達し、厚沢部川の氾濫原を構成する（参考文献：北海道開発庁1970、工業技術院地質調査所1975）。

（3）館城跡関連遺跡（図2）

館城跡及び箱館戦争関連遺跡として、①官軍の沢、②稲倉石古戦場、③鶉村古戦場、④丸山古戦場、⑤ロクロ場、⑥開墾役所跡、⑦米揚倉などがある。①は、明治2（1869）年に新政府軍の進撃路となった沢、②～③は館城攻防戦にともなう古戦場、⑤～⑥は安政年間に設置されたとされる開墾役所跡とそこへ荷揚げした伝えられる地域である。⑦は館城跡に物資を荷揚げしたと伝えられる地域である。

②稲倉石古戦場は、明治元(1868)年11月10日、館城攻略のため箱館五稜郭を出陣した旧幕府軍一聯隊と松前藩兵との戦闘が行われた古戦場である。古戦場は、現在の鶉ダム築堤付近と推測され、ダム建設地に選定されたことから明らかなように、急峻な岩山からなる地峡である。この地点を旧幕府軍に突破された場合、その背後は鶉川が開析した平野が広がり、館城までの進撃を許すこととなる。松前藩としては館城防衛上、稲倉石の守備は必須であった。そのため、松前藩は谷底の道路を封鎖し、小口径砲数門を装備した陣地を構築していた。旧幕府軍による陣地の攻略は困難とみられたが、左右

の岩山から狙撃されたため、支えきれずに陣地を捨てて敗走した。

③鶉村古戦場は、鶉村に宿陣した旧幕府軍の本陣を松前藩軍が強襲したことから起こった戦闘である。稲倉石で松前藩軍を敗走させた旧幕府軍は、11月13日鶉村（現字鶉）へ進軍し、ここに宿陣する。翌14日、２小隊を偵察のため館村へ派遣したところ、俄虫村（現本町・新町ほか）方面から進んできた松前藩兵が鶉村本陣を襲撃した。旧幕府軍は暫時の戦闘の後これを撃退している。

④丸山古戦場は、旧幕府軍の偵察隊と館城から進出した松前藩側の偵察隊との小競り合いである。11月14日、旧幕府軍が２小隊を偵察のため館村へ派遣したところ、鶉村から館盆地へと越える小丘陵において、松前藩兵と遭遇し、戦闘となった。この戦闘では、旧幕府軍のラッパの音に驚き、松前藩兵が敗走したことが「麦叢録」（菊地1998）などに記されているほか、松前藩側の証言からも確認されている（『櫻島－厚沢部町の歩み－』p448）。

⑤開墾役所跡は、館城築城以前に松前藩が設置したとされる役所の跡である。次節５項で詳述する。

２．館城築城とその経緯

（１）13代藩主崇広の死去と徳広の藩主就任

松前藩13代藩主松前崇広は、慶応２年四月に病死する（『北門史綱』巻六　永田1991）。

崇広の死後、12代藩主の嫡子徳広が藩主に就任するものの、病弱な徳広は政務を執ることができず、藩政の中枢は、松前勘解由など崇広時代の重臣らが掌握したままであった。こうした状況に反発する反勘解由派の藩士達が、『建言書』（『慶応二丙寅十一月旧寄合中より建言書』 江差町史編集室1979）を藩主徳広に上申した。これにより松前勘解由は家老職を辞することとなるが、反勘解由派の蠣崎民部らは脱藩の罪に問われ、また、藩政は依然として勘解由派が取りしきっていた。

（２）正議隊のクーデター

明治元(1868)年７月28日、反勘解由派の藩士達は、『正議隊建白書』（江差町史編集室1979）を藩主徳広に提出した。『建白書』を受けた徳広は、勘解由ほか４名の重臣の登城を差し止めたが、勘解由らはこれに従わず、町役所に諸士を呼び集め密議を行なったという（『奉命日誌』江差町史編集室1979）。

７月29日、江差奉行尾見雄三が、江差在郷藩士らを率いて江差から出動し、８月１日に福山城下へ到着した（『慶応四年四月より行事見聞録』江差町史編集室1983）。尾見は、かねてから江差在郷の藩士や江差商人団を反勘解由派に引き込んでおり、江差商人団が反勘解由派の資金源となったとの見解がある（『江差町史』第六巻通説二p5）。

尾見の到着により勢力を増した正議隊は、８月１日から勘解由派の粛清を開始した。一連の粛清は、９月24日の山下雄城の処刑をもって一段落し、勘解由派の主要人物のほとんどを殺害する結果となった。

（３）館城の築城

勘解由派に対する大量粛清により藩政の実権を手にした正議隊首脳部は、館村への築城を計画した。『奉命日誌』９月11日の項に「館村へ御築城願書壱通ハ下国東七郎ヲ以テ　太政官へ進達　壱通ハ雄三裁判所へ進達」とあり、館城築城に係る願書が、下国東七郎によって太政官及び箱館裁判所へ提出された。この築城願書に対する新政府築城許可書は11月11日付で交付されている（『江差町史』巻六通説二p36）。『報功心血』（函館市中央図書館蔵）では、「館村移城を決すると雖ども、未だ朝廷の裁可を得ざるの間は、公然たる経営を唱ふる能はず。故に勧農の名に藉りて、これが準備に従はしむるの内儀となり」とあり、鈴木文五郎、牧村可也、今井愚一、鈴木次郎蔵、三浦巽、石塚和平が「準備

委員」として「専任」された。『奉命日誌』８月28日の項には、氏家丹宮、鈴木又五郎、牧村可也、今井晦輔、鈴木次郎蔵、石塚知平、三浦巽らが勘農方として江差表へ出張を命じられ、関川平四郎が御先手組へ取り立てられ、勘定奉行・作事方を命じられたことが記されている。すなわち、館城築城について、８月末の段階では新政府の許可が得られていないため、勘農の名目によって現地作業が開始されたと考えられる。

館城築城工事の経過は、勘定奉行兼作事方を任命された江差の豪商、関川重孝（平四郎）が残した日記によって、うかがい知ることが出来る（江差町史編集室1981）。以下、関川平四郎日記により、館城築城工事の様子を考える。

９月２日に館村の鈴木文五郎に宛てて遠眼鏡を送ったことが記されており、この時期に、担当者が現地入りしていたことを知ることができる。９月14日には、大工四十人・木挽十人が館へ向けて出立している。９月21日には、福山から大工棟梁孝次郎はじめ、下職28名が江差へ到着し、館へ向けて出立している。

また、９月12日頃から土木作業が開始されており、９月23日現在の延べ人工数は、1,525人工に達している。９月28日現在の館城普請に係る人員は、大工棟梁浜田仁兵衛、幸治郎以下、大工小頭五人、木挽２人、平大工92人、下木挽21人、土方小頭７人、土方243人、人足183人となっている。

10月14日には、建具師３人が木材と供に館へ向かっており、また、10月16日には、間似合、唐紙、玉子などの襖材料が館へ送られており、館城普請は、内装作業へと移りつつあったことがわかる。

10月24日には、棟上げの儀式が行われたことが記されており、城内の重要な建物の棟上げが行われたことを知ることができる。10月26日には、七飯峠下での旧幕府軍と新政府軍との戦闘を受けて、三上超順や今井興之丞が、手勢を引き連れて木間内まで出張している。館城普請の最終的な結果については触れられていないが、関川重孝の築城日記もこの10月26日をもって終わっており、この前後に、館城の普請もほぼ終了していたと考えられる。

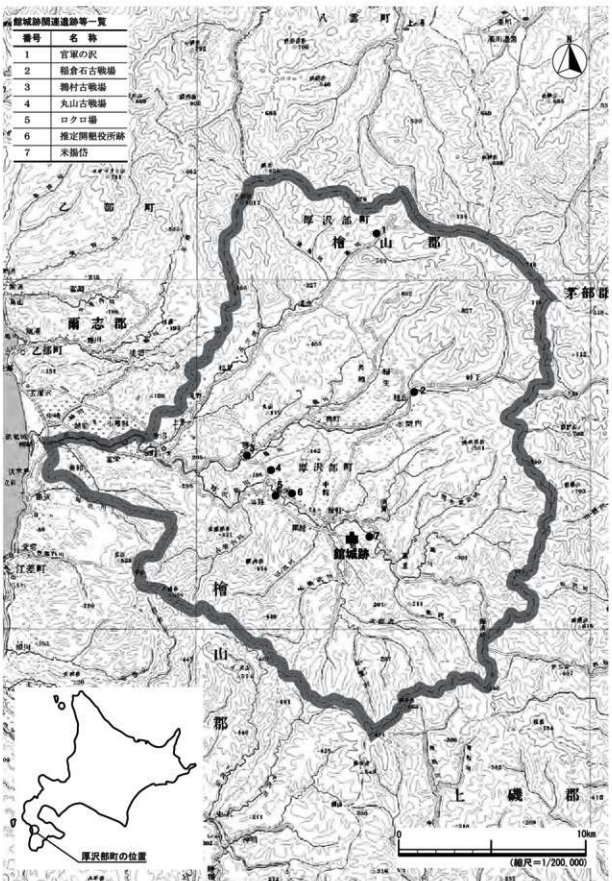


図２　厚沢部町の位置と館城跡関連遺跡（国土地理院発行数値地図200000（地図画像）6240、6340を合成して加筆）

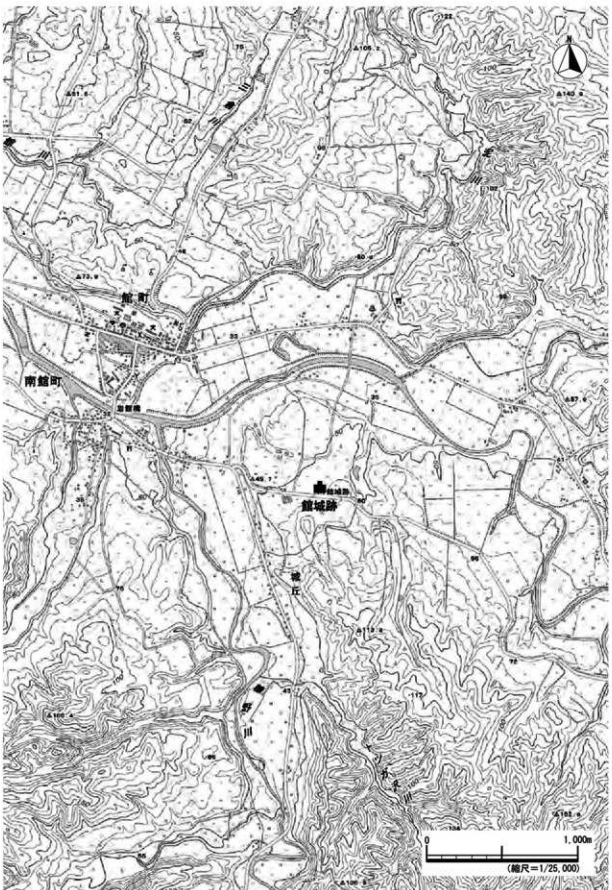


図３　館城跡の位置と周辺の地形（国土地理院発行数値地図25000(地図画像)624062に加筆）

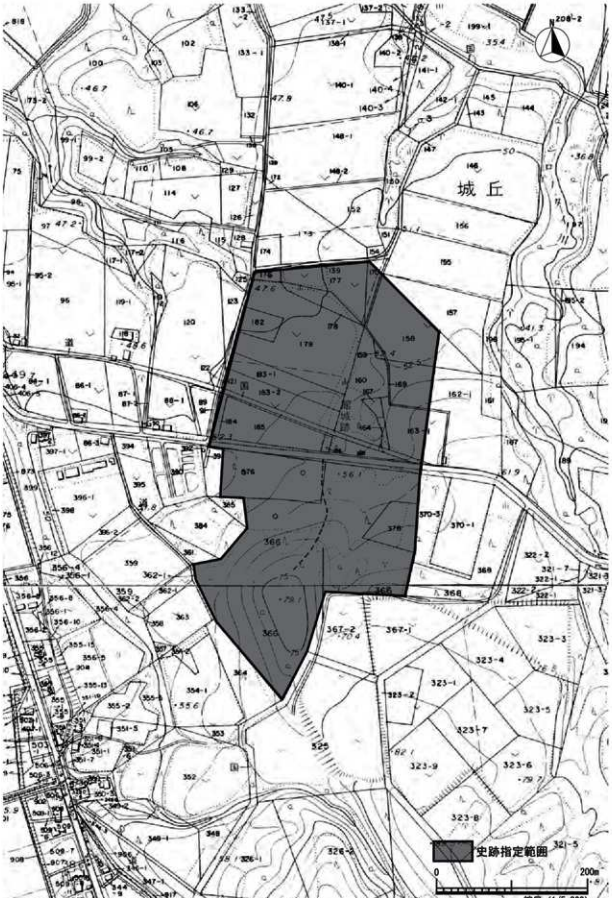


図４　指定地周辺の地形と指定範囲

Ⅲ章　調査の方法

1．発掘調査基線（図５）

1988年～1990年の発掘調査グリッドを踏襲することとした。このグリッドは、平成14年の測量法改正以前の旧日本測地系（平面直角座標系ＸⅠ系）に沿って設定された20m方眼を基本とし、南から北へ向かってA、B、C、・・・、東から西へ向かって０、１、２・・・としている。なお、Aラインより南側については、北から南へ向かって、Ｚ０、Ｙ０、Ｘ０・・・と表記する。

この方眼は、直交するラインの交点から北西の20m平方を、その交点のアルファベットと数字の組み合わせで呼称し（例：B-2）、さらに10m方眼の小グリッドに分割した。小グリッドは、グリッドの基点となる交点（杭の打設位置）から反時計まわりにａ、ｂ、ｃ、ｄとした（例：B-2-c）。

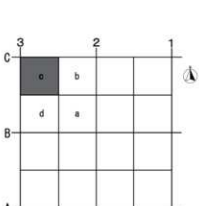


図５　グリッドの呼称方法

今年度の発掘調査に使用したグリッド杭は、平成17年に(有)安藤測量設計事務所に委託し、指定地内町有地及び指定地周辺の町道におよそ50m間隔で設置した基線杭を基準に格調査区域へ打設した。各調査区へ打設したグリッド杭の基準点は下表のとおりである。

表３　平成21年度館城跡発掘調査基準杭と座標（世界測地系平面直角座標ＸⅠ系）

調査区名	基線杭名称	Ｘ座標	Ｙ座標	標高
第１調査区 第２調査区	13ライン２	-235558.264	7606.678	53.628
	C-13-b	-235593.580	7606.679	53.650
第３調査区 第５調査区	H-5-c	-235493.584	7756.681	52.743
	K-5-d	-235443.584	7756.680	52.194
第４調査区	C-13-b	-235593.580	7606.679	56.912
	C-10-c	-235593.581	7656.680	55.497

2．調査の方法

（１）掘削

第１調査区及び第２調査区の表土掘削にバックホウ（平積0.35㎥）を使用した。表土掘削後、人力による残土除去及び調査区壁の清掃を行った。

第３調査区及び第４調査区は人力による表土掘削を行った。草根の及ぶ５～10㎝の深さまではスコップ・ジョレンを使用し、それ以下の掘削には移植ゴテを使用した。

いずれの調査区においても掘削は表土（Ⅰ層）にとどめ、サブトレンチなど部分的に掘り下げを行った箇所以外、Ⅱ層以下への掘削は行っていない。

遺構の掘削には移植ゴテを利用した。

第５調査区は地下への掘削は行わず、ピンポールを使用した地表面での礎石確認と除草による検出

を行った。

（2）現地測量

現地での実測図面は縮尺20分の1を基本とした。調査区全体遺構配置図及びその周辺の地形測量図は100分の1で作図した。

遺構の平面測量は、グリッド杭を基準として設定した簡易な水糸遣方により、手作業で行った。水準測量は、水準点が設置された基線杭から直接計測した。使用機材はオートレベルと5㎜目盛りのアルミスタッフで、基線杭と対象との比高を直接観測して行った。

遺物の取り上げは原則として出土グリッド及び層位ごとに行い、グリッド、層位、日付を記録した。グリッドは10m平方の小グリッド単位での表示を基本とした。第5調査区については、建物毎に桁行を1、2、3・・・、梁行をい、ろ、は・・・とする半間四方のグリッドを設定し、このグリッド毎に取り上げを行った。

（3）細部地形レーザー計測

「伝米倉跡」の整地層や柵列などの微細な地形データを高精度で記録し、さらに調査成果のCG表現等による活用のために、3次元レーザースキャナーによる地形測量を実施した。

測量業務は株式会社シン技術コンサルに委託し、実施した。使用機材はニコントリンブル製GS200で、10㎜ピッチのメッシュ計測を行った。

納入成果品は測量成果のほか、AdobeReader互換による3次元画像2種類とした。図20～22の「3次元現況地形図」は位置情報＋画素情報を有するスキャンデータ（点群写真画像）を使用した。これを印刷品質に必要な解像度まで拡大表示し、ビューワソフト（AdobeReader）画面上で印刷品質に必要な解像度で画像を切り出し、再結合したものである。

（4）礎石トータルステーション計測

礎石の位置及び形状計測のため、光波距離計付トランシットによる計測を行った。データ取得精度は500分の1作図精度とし、礎石の平面形状及び主要な稜線について計測を行った。取得データはDXF形式及びai形式（Adobe Illustrator形式）で納品を受けた。

（5）写真記録

写真記録は調査前、調査状況、遺構等検出状況、土層断面、調査終了状況等を撮影した。撮影機材は、Mamiya RB67 PROFESSIONAL SD（中判フィルムカメラ）＋Mamiya KL65mmF4LとMamiya KL127mmF3.5L及びNikon D70S（デジタル一眼レフカメラ）＋Nikkor AiAF20mmF2.8D＋Nikkor AiAF50mmF1.4Dで、中判カメラでは、120サイズのリバーサルフィルム（フジクローム プロビア100F（RDPⅢ120））を使用した。デジタルカメラは、2240×1488ピクセルのJPEG形式で撮影・保存した。

遺物撮影も同様のシステムを使用し、中判カメラではリバーサルフィルム（フジクローム T64（RTP120））を使用した。

写真記録は、原則として、中判カメラ、デジタルカメラともに同一カットを撮影し、デジタルカメラでは、この他に、調査状況写真や途中経過写真等を撮影し、調査記録の一助として活用した。

（6）1次整理

出土遺物は、調査終了後に水洗し、分類、一覧表作成、注記等の一次整理作業を行った。注記は遺跡名（TJ08）、遺構またグリッド名称、層位、取上げNo.の順に、白または黒のポスターカラーで記入し、その上にラッカーを塗布して保護した。

（7）2次整理

現地測量図面は、必要な訂正や変更を加え一次原図とした。一次原図をスキャナ（CanonScan 8800F）でコンピュータ上に取り込み、Adobe Illustrator（CS）で編集及びトレースを行い、報告書印刷用図版とした。

写真記録のうち、リバーサルフィルムは、撮影順にネガアルバムに収納し、撮影時の記録（日付、撮影方向、撮影対象）をシールに記入し、ネガシートの上からそれぞれのフィルムに貼付けした。デジタルカメラ撮影分は、リバーサルフィルムと同一カット及び重要なものについてL判（12.5㎝×8.7㎝）に出力し、アルバムに収納した。オリジナルデータは、DVD-Rに保存した。

（8）保管

出土遺物は整理作業終了後に遺物登録台帳を作成し、掲載・非掲載、遺構・包含層、分類、出土グリッドなどの基準で分別して収納し、さらに、厚沢部町郷土資料館収蔵品として、コンテナ、ダンボールなどの梱包単位毎に「厚沢部町郷土資料館収蔵資料台帳」に登録した。

原図・素図等の図面類、写真記録は厚沢部町教育委員会で保管する。

3．基本層序（図6）

基本層序の分類は、『館城跡　遺構確認調査報告書』（厚沢部町教育委員会・十勝考古学研究所1989年）のそれ（以下旧層序）を踏襲した。なお、基本層序の土色、土性は、平成17年調査の南側盛土西部（第1調査区）における断面観察の結果を基準としている（厚沢部町教育委員会2007－図8参照）。

遺物包含層はⅠ層及びⅡ層で、Ⅲ層以下は腐植土の発達しない旧石器時代以前の堆積層の可能性が高い。

Ⅰ層：表土・耕作土　黒褐色（10YR2/2）埴壌土　粘性中　堅密度堅

草の根の混じる地表面下約10㎝の自然堆積層及び耕作土を総称した。旧層序Ⅰ層に相当。

Ⅱ－1層：黒色（10YR2/1）埴壌土　粘性中　堅密度堅

旧層序Ⅱ層に相当。

Ⅱ－2層：にぶい黄橙色（10YR6/4）砂壌土　粘性弱　堅密度軟

降下火山灰と考えられる砂質の堆積層である。遺跡周辺では、平坦地で約5㎝の層厚が一般的のようである。旧層序Ⅲ層に相当。

Ⅱ－3層：黒褐色（10YR2/3）埴壌土　粘性中　堅密度堅

土性はⅡ－1層に似る。黄色味を帯びるのはⅡ－2層の影響と推測する。旧層序Ⅳ層に相当。

Ⅱ－4層：黒色（10YR2/1）埴壌土　粘性中　堅密度堅

土性、土色ともにⅡ－1層によく似るが、土質の粒状性がやや緻密で、土色はやや明るいように感じる。旧層序Ⅴ層に相当。

Ⅲ層：褐色（10YR4/6）埴壌土　粘性中　堅密度堅　旧層序Ⅶ層に相当。

図6　基本層序模式図

Ⅳ章　遺構と出土遺物

1．第１調査区（図７～13、写真２～５）

（１）調査区の概要

平成18年度調査区で検出された堀・柵列の延長を検出することを目的として，史跡指定地外西側の耕作地に幅約10m、長さ約110mの調査区を設定した。調査の結果、堀・柵列は耕作地まで伸びておらず、町道「上館城ノ岱線」の道路敷地内で屈曲し、北へ延びる可能性が高いと判断したことから、町道に沿って６箇所のサブトレンチを設定した。

（２）メイン調査区（図７、写真２）

南東から北西に緩やかに傾斜する。耕作深度は約40㎝で、耕転方向である東西方向に暗渠排水の痕跡を多く確認できた。調査区の北側は、「与惣吉沢」へと落ち込んでいく。

堀・柵列の検出はＫラインから約５m北と予想されていたが，これを検出することはできなかった。このことから、堀・柵列は町道「上館城ノ岱線」の道路敷地内で屈曲し、北へ延びる可能性が高いと判断し、町道敷地の東西に６箇所のサブトレンチを設定し、堀・柵列の検出を行うこととした。

（３）サブトレンチ１（図８、写真３）

町道「上館城ノ岱線」の東側で平成18年度調査区に隣接する位置に幅約１m、長さ約７mの調査区を設定し、断面で堀を検出した。

規模・形状：開口部北側は排水用の塩化ビニール管の掘方で壊されているが、開口部の幅約１m、底面で0.4m、検出面からの深さ0.6mである。坑底は平らで箱堀状である。壁は坑底付近ではほぼ垂直に立ち上がり、坑底から約30㎝のところから急激に外反する。

土層：図８A-A'土層１は塩化ビニール管の掘方。土層３～５は黄褐色ローム粒を多く含む。土層６～７は黒褐色土を主体とし、混入物をあまり含まない。

考察：土層３～５は黄褐色ローム粒を多く含む均質な堆積であることから、埋戻しによる堆積と判断した。土層６～７は周囲からの土砂の流入による自然堆積である。

（４）サブトレンチ２（図９）

町道「上館城ノ岱線」を挟んでサブトレンチ１の反対側に位置する。メイン調査区で堀・柵列が検出されなかったことから、町道に沿って幅約１m、長さ約８mの調査区を設定した。調査区断面及び平面で堀・柵列、その他の遺構を確認することはできなかった。

土層：図９A-A'土層１～15は褐色ローム粒を含む黒褐色土を主体とし、基本層序Ⅲ層起源の黄褐色土で構成される。土層16は混入物の少ない黒色土である。

考察：土層１～15は町道造成に伴う盛土、土層16は旧耕作土である。

（５）サブトレンチ３（図10）

町道「上館城ノ岱線」西側、サブトレンチ２から北へ約10mのところに幅約１m、長さ約５mの調査区を設定した。サブトレンチ４及び５で溝状の遺構を検出したことから、調査区北端を東側に１m拡張し、溝状の遺構を検出した。

規模・形状：溝状の遺構の東側立ち上がりが調査区外となることから、幅は不明、検出面からの深さは約0.2mである。坑底は平らで、約45°で内湾気味に立ち上がる。

方位：平面検出範囲が狭いため不正確だが、N-13°-Eである。

土層：図10A-A'土層１～２は黒褐色土主体で黄褐色ローム粒を少量含む。A-A'土層３～４は黄褐

色土主体である。B-B'土層1は黒褐色土主体、土層2は明黄褐色土主体、土層3～4は黒褐色土主体である。

考察：A-A'土層1～4、B-B'土層1～2が町道造成に伴う盛土である。B-B'土層3は周囲からの流れ込みによる自然堆積、A-A'土層5、B-B'土層4は旧耕作土である。

（6）サブトレンチ4（図11）

町道「上館城ノ岱線」西側、サブトレンチ3から北へ約15mのところに幅約1m、長さ約5mの調査区を設定した。坑底面の幅約0.6mの溝状の遺構を検出したことから、調査区北端を東側に1m拡張した。

規模・形状：坑底面での幅約0.6m、検出面での開口部の幅は0.7m、検出面からの深さは0.15mである。坑底面は平らで幅約10cmの溝が等間隔で並ぶ。壁は外反しながら約60°の角度で立ち上がる。

方位：平面検出範囲が狭いため不正確だが、N-15°-Eである。

土層：図11A-A'土層1～3は黄橙色土が主体、土層4～7は黄褐色ローム粒を少量含む黒褐色土である。

考察：坑底面に等間隔に並ぶ幅約10cmの溝はパワーショベル等のバケットの痕跡であろう。土層1～3は基本層序Ⅲ層に由来するしまりのある黄橙色土で、町道「上館城ノ岱線」造成に伴う盛土である。土層4～5、7は町道「上館城ノ岱線」拡幅以前の耕作土である。土層6は周囲からの土壌の流入による自然堆積層である。

（7）サブトレンチ5（図12、写真4～5）

サブトレンチ4から北へ約15mのところに幅約1m長さ約5mの調査区を設定した。調査区の南北端を東へ1m拡張し、溝状の遺構を検出した。

規模・形状：坑底面での幅約0.6m、検出面での開口部の幅約0.7m、深さ約0.1mである。坑底面は平らで、幅約10cmの溝が等間隔で並ぶ。西側の壁は残存せず、東側はやや内湾気味に約80°の角度で立ち上がる。

方位：N-10°-E

土層：図12A-A'土層1～7、9～10は黄褐色ローム粒を含む黒褐色土主体、土層8、11は褐色土、黄橙色土主体である。土層12軟質の黒褐色土である。図12B-B'土層1、3～6は黄褐色ローム粒を含む黒褐色土主体、土層2、7は褐色土、黄橙色土が主体である。

考察：坑底面に等間隔に並ぶ幅約10cmの溝はパワーショベル等のバケットの痕跡であろう。A-A'土層1～11、B-B'土層1～7は黄褐色ローム粒を含む黒褐色土が主体、A-A'土層8、11、B-B'土層2、7は黄褐色土を主体とするが、いずれも人為的な堆積層で、町道「上館城ノ岱線」造成に伴う盛土である。A-A'土層12は溝状の遺構内に形成された自然体積層である。

（8）サブトレンチ6（図13）

サブトレンチ5のから北へ15mのところに幅約1m、長さ約5mの調査区を設定した。本調査区の北には「与惣吉沢」が位置する。

土層：図13土層1～4、6、9～10は黄褐色ローム粒を含む黒褐色土で、土層5、7～8は黄褐色土を主体とする。土層11は明黄褐色ローム粒をわずかに含む黒褐色土である。

考察：土層1～10は黒褐色土及び黄褐色土で構成され、明黄褐色土がブロック状に含まれる。町道「上館城ノ岱線」造成に伴う盛土である。土層11は「与惣吉沢」へ続く落ち込みを人為的に埋戻した堆積である。

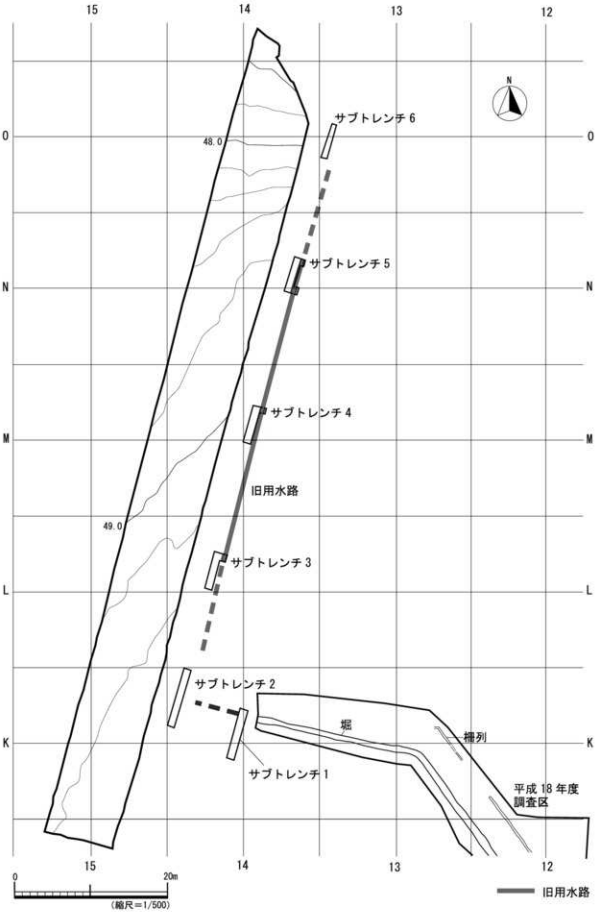


図 7　第 1 調査区遺構配置図

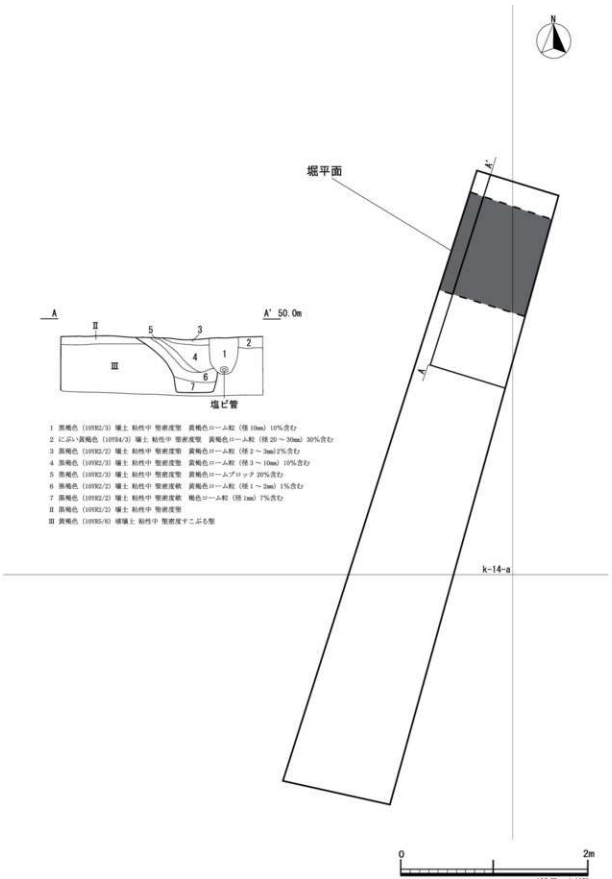


図8　第1調査区サブトレンチ1

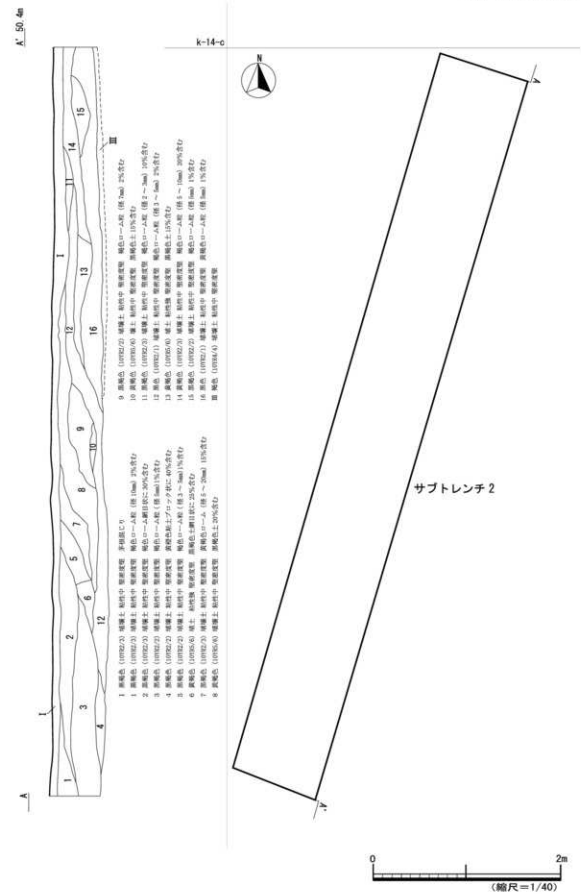


図９　第１調査区サブトレンチ２

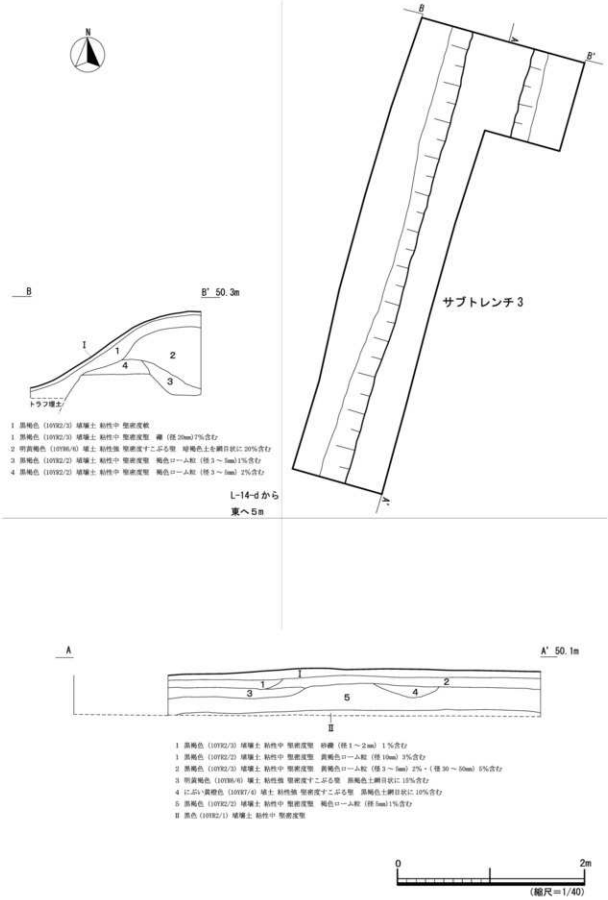


図10　第1調査区サブトレンチ3

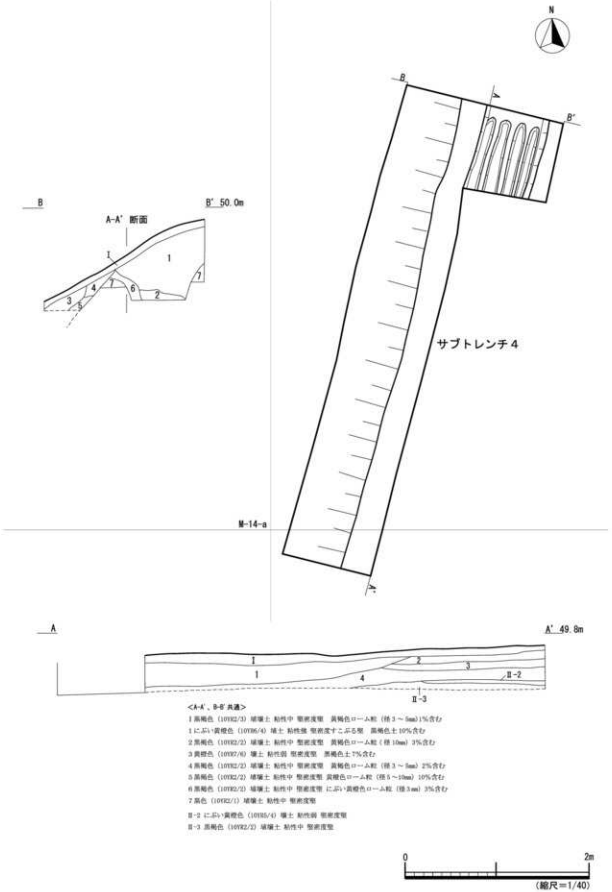


図11　第１調査区サブトレンチ４

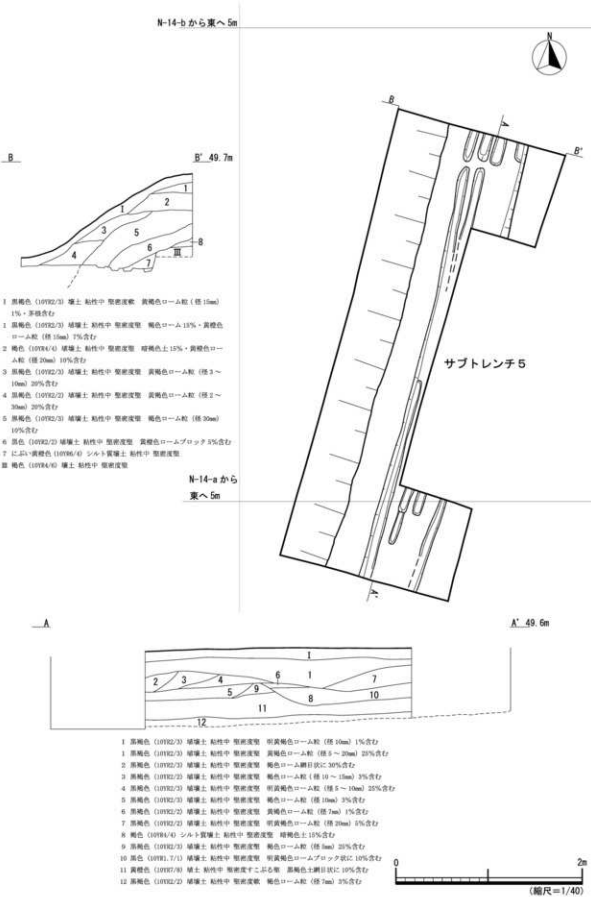
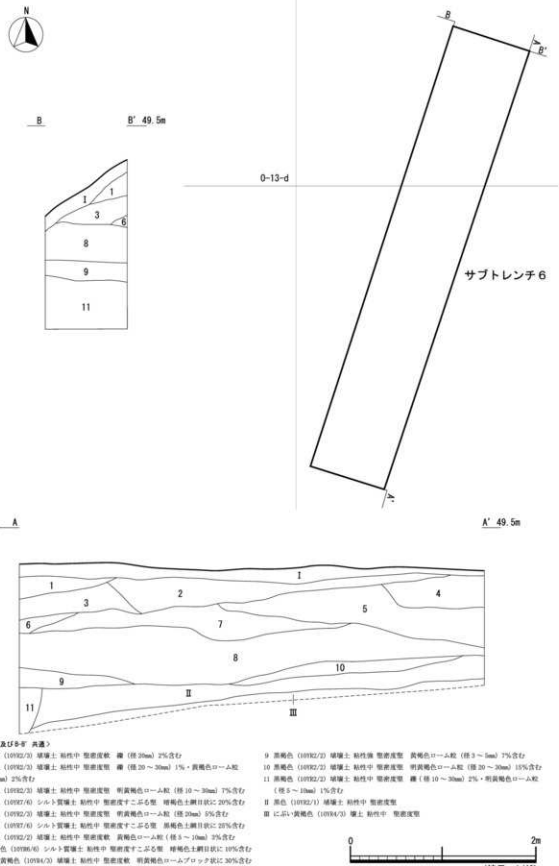


図12　第１調査区サブトレンチ５



〈A-A' および B-B' 共通〉

1　黒褐色（10YR2/3）埴壌土　粘性中　堅密度軟　礫（径 20mm）2%含む
1'　黒褐色（10YR2/3）埴壌土　粘性中　堅密度堅　礫（径 20 ～ 30mm）1%・黄褐色ローム粒（径 20mm）2%含む
2　黒褐色（10YR2/3）埴壌土　粘性中　堅密度堅　明黄褐色ローム粒（径 10 ～ 30mm）7%含む
3　黒褐色（10YR7/6）シルト質埴土　粘性中　堅密度すこぶる堅　暗褐色土斑目状に 20%含む
4　黒褐色（10YR2/3）埴壌土　粘性中　堅密度堅　明黄褐色ローム粒（径 20mm）5%含む
5　黄橙色（10YR7/6）シルト質埴土　粘性中　堅密度すこぶる堅　黒褐色土斑目状に 25%含む
6　黒褐色（10YR2/2）埴壌土　粘性中　堅密度軟　黄褐色ローム粒（径 3 ～ 10mm）3%含む
7　明黄褐色（10YR6/6）シルト質埴土　粘性中　堅密度すこぶる堅　暗褐色土斑目状に 10%含む
8　にぶい黄褐色（10YR4/3）埴壌土　粘性中　堅密度軟　明黄褐色ロームブロック状に 30%含む
9　黒褐色（10YR2/2）埴壌土　粘性強　堅密度堅　黄褐色ローム粒（径 3 ～ 5mm）7%含む
10　黒褐色（10YR2/2）埴壌土　粘性中　堅密度堅　明黄褐色ローム粒（径 20 ～ 30mm）15%含む
11　黒褐色（10YR2/2）埴壌土　粘性中　堅密度堅　礫（径 10 ～ 30mm）2%・明黄褐色ローム粒（径 5 ～ 10mm）1%含む
II　黒色（10YR2/1）埴壌土　粘性中　堅密度堅
III　にぶい黄褐色（10YR4/3）壌土　粘性中　堅密度堅

図13　第1調査区サブトレンチ6

2．第２調査区

（１）調査区の概要（図１）

史跡指定地北側を東西に流れる用水路は館城築城期から自然の流路として存在していた可能性が高いと判断されたことから、この自然の流路が区画の一部として機能していた可能性を検証するために、用水路の南側に２箇所の調査区を設定し、柵列等の区画遺構の検出を行うこととした。

（２）２－１調査区（図14～15、写真６～７）

史跡指定地北西端に位置し、第１調査区とは町道「上館城ノ岱線」を挟んで隣接する。パワーショベルで表土を掘削したところ、礫層が検出され、さらに湧水により掘削が困難となったことから、調査区の北側では生活面の検出を断念した。比較的、表土・礫層の薄い調査区南半部のみ生活面の検出をおこなった。

地形：南側から北へ向かって急激に傾斜する。調査区中央は入江状の低地となる。

遺構等：幅約1.3m、深さ約１mの溝を検出した。坑底に直径５～10㎝、長さ１～２mに玉切したカラマツが敷かれている。埋土は埋戻しによるもので、Ⅲ層起源の黄褐色ロームがブロック状に含まれる。その他の遺構は検出されていない。

土層：図15A-A' 土層１は径20mmの礫を含み、土層２～５は黒褐色土主体で、黄褐色ロームがブロック状に混ざる。土層６は黄褐色ロームを少量含む黒褐色土である。

考察：坑底にカラマツが敷かれる溝については、カラマツの植林が道内で本格的に行われる昭和期以降の所産と推測する。調査区全体の地形については、調査区中央に入江状の低地があり、本来、流路というよりも、低湿地であったと考えられる。土層１～５は重機などを使用して低地を埋め戻した際に形成された人為的な堆積層で、土層１は礫を含む埋め戻し土で、他所から持ち込まれた土砂が整地のために投入された可能性がある。土層６は土層１～５形成以前の耕作土である。

（３）２－２調査区（図16～17、写真８～９）

第３調査区の北西に位置し、用水路を挟んで第３調査区に隣接する。用水路に沿って用水路の南西側に調査区を設置した。用水路に沿って流路が検出された。この流路は農地造成によって埋め戻されており、埋戻しによる人為堆積層を除去したところで、遺構確認、地形測量を行った。

地形：南東から北西に向かって緩やかに傾斜する。流路の幅は調査区壁から測って４～６m、現況水路が幅約２mであることから、当初は幅６～８mの流路であったと推測できる。人為堆積層除去後の流路底面の深さは現地表面から約0.7mである。

遺構等：確認できない。

土層：図17A-A' 土層１～４、６、８～11は黄褐色ローム粒を多く含む黒褐色土、土層５、７は黄褐色土主体、土層12～14は混入物のない土層である。土層12～13は基本層序Ⅱ−1層に相当し、土層12は土層13が酸化したものである。土層14は基本層序Ⅱ−2層に相当する。土層12は花粉分析試料No.1、土層13は花粉分析試料No.2、土層14は火山灰試料No.1の採取層位である。

考察：土層１は旧耕作土、土層２～11は流路の埋戻しによる自然堆積層である。土層12、13上面が流路埋戻し以前の生活面である。火山灰分析の結果、土層14は1694年降灰の駒ケ岳C2テフラ(Ko-C2)と同定されていることから（第Ⅴ章第１節参照）、館城築城期の生活面は土層12～13中と推定できる。

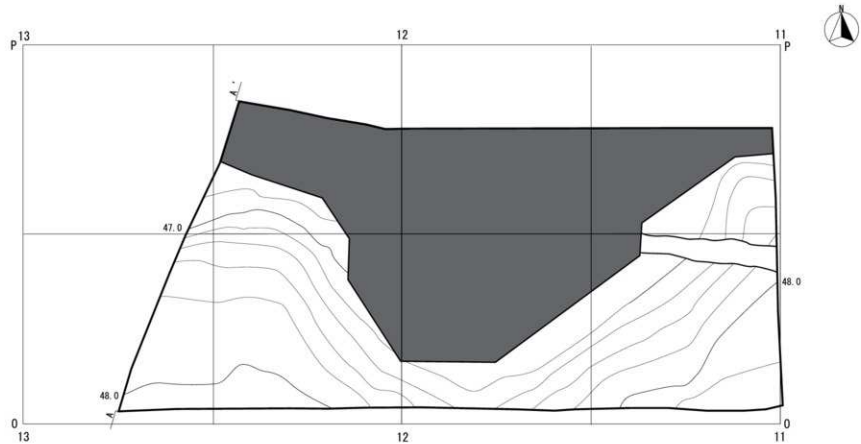


図14　2－1調査区遺構配置図

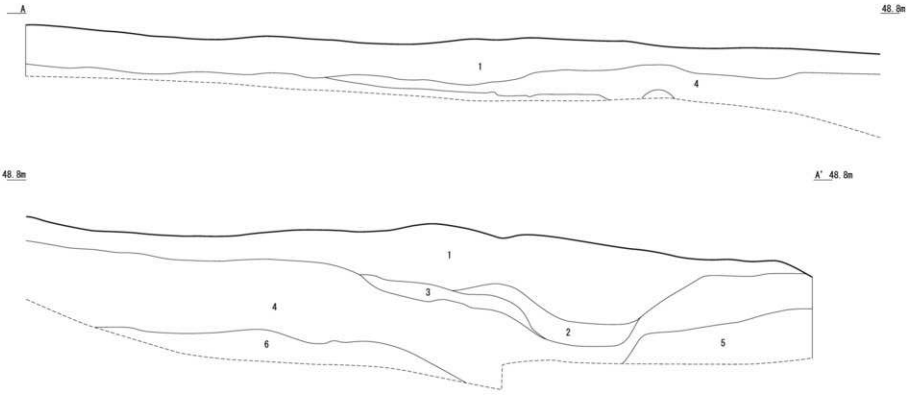


図15　2－1調査区西壁断面図

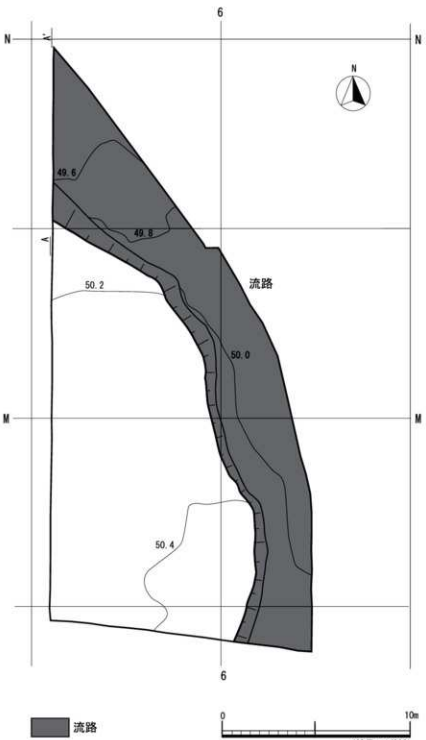
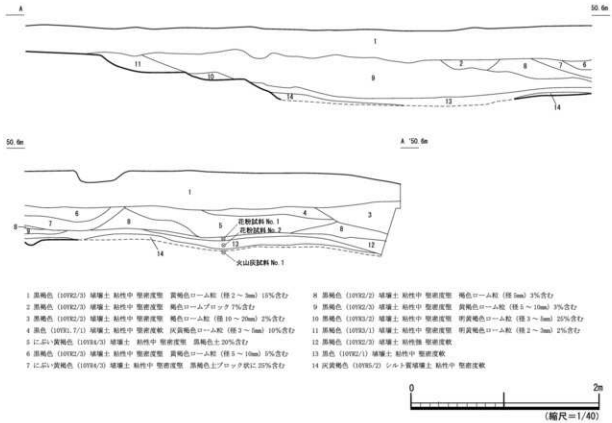


図16　２－２調査区遺構配置図



1 黒褐色（10YR2/3）埴壌土 粘性中 堅密度堅　黄褐色ローム粒（径２～３mm）15%含む
2 黒褐色（10YR2/3）埴壌土 粘性中 堅密度堅　褐色ロームブロック 7%含む
3 黒褐色（10YR2/2）埴壌土 粘性中 堅密度堅　褐色ローム粒（径 10 ～ 20mm）2%含む
4 黒色（10YR1.7/1）埴壌土 粘性中 堅密度軟　灰黄褐色ローム粒（径３～ 5mm）10%含む
5 にぶい黄褐色（10YR4/3）埴壌土　粘性中 堅密度堅　黒褐色土 20%含む
6 黒褐色（10YR2/3）埴壌土 粘性中 堅密度堅　黄褐色ローム粒（径５～ 10mm）5%含む
7 にぶい黄褐色（10YR4/3）埴壌土 粘性中 堅密度堅　黒褐色土ブロック状に 25%含む
8 黒褐色（10YR2/3）埴壌土 粘性中 堅密度堅　褐色ローム粒（径 5mm）3%含む
9 黒褐色（10YR2/3）埴壌土 粘性中 堅密度堅　黄褐色ローム粒（径５～ 10mm）3%含む
10 黒褐色（10YR3/2）埴壌土 粘性中 堅密度堅　明黄褐色ローム粒（径３～ 5mm）25%含む
11 黒褐色（10YR3/3）埴壌土 粘性中 堅密度堅　明黄褐色ローム粒（径２～ 3mm）2%含む
12 黒褐色（10YR2/3）埴壌土 粘性強 堅密度軟
13 黒色（10YR2/1）埴壌土 粘性中 堅密度軟
14 灰黄褐色（10YR5/2）シルト質埴壌土 粘性中 堅密度軟

図17　２－２調査区西壁断面図

3．第３調査区（図18～23、写真10～12）

（１）調査区の概要（図18、写真10）

平成20年度調査区において検出した柵列の延長及び整地層の範囲を確認することを目的として、平成20年度調査区の南西に調査区を設定した。調査区西側には、第２調査区へ続く用水路が南北方向に延びる。調査区内の北側には南東から北西方向に延びる沢状地形があり、この沢状地形も調査範囲に加え、地形測量等を行った。平成20年度に検出した柵列（SA2）の延長上で「溝状遺構」を検出したことから、調査区東壁に東西２m、南北３mのサブトレンチを設定し、「溝状遺構」の断面確認を行った。

（２）「溝状遺構」（図18、19、23、写真12）

規模・形状：検出面での幅約0.3m、検出面からの深さ0.4mである。坑底はほぼ平らで壁は内湾気味にほぼ垂直に立ち上がり、開口部付近で外反する。柱痕は確認できない。また、掘込も不明瞭である。

方位：N-89°-W

土層：図23B-B'土層１～２は均質で混入物の少ない黒色土、土層３～13は灰黄褐色土を主体として、黄橙色火山灰粒や黒褐色土を含む。堅密度はいずれも高い。土層14～17は混入物のない均質な土壌である。土層14～17は平坦ではなく、北側が盛り上がっているが、特に人為的なものではなく、自然地形と考えられる。

考察：土層１～２は「溝状遺構」の埋土である。平面、断面ともに柱痕が確認されなかったことから、柵列とは断定できないが、平成20年度調査区において検出した柵列（SA2）の延長上に位置し、規模、形状、方位が一致することから、何らかの区画施設と判断したい。掘方の掘込が不明瞭であることから、整地層上面から掘込まれたのではなく、整地層構築と同時に柵などの構造物を設置した可能性もある。構築の具体的な方法は明らかにできなかった。

（３）整地層（図18～23、写真10）

規模・形状：整地層の広がりについては、平成20年度、21年度ともに東側及び南側の範囲が検出されていない。整地層の西端については、第２調査区へ続く流路の上端に一致し、北側では、「沢状地形」の上端に一致する。整地層の上端から西側の用水路底面、北側の「沢状地形」底面までの比高差は約1.5m、斜度は約45°で、徒歩による昇降は困難である。整地層の厚さは約0.7mである。整地層の上面はほぼ平らである。整地層周辺の旧地形は、南東から北東へ５～６％の下り勾配と推測でき、整地層によってこの下り勾配が解消されてほぼ水平な平坦面が造成されている。

土層：（２）「溝状遺構」の項で詳述

考察：土層１～２は「溝状遺構」の埋土、土層３～13は整地層を構成する堆積土である。土層14は基本層序Ⅱ−1層相当、土層15は基本層序Ⅱ−2層相当、土層16は基本層序Ⅱ−3層相当、土層17は基本層序Ⅱ−4層相当である。整地層を構成する土層３～13はⅢ層起源の灰黄褐色シルト質壌土を主体とし、周辺の自然堆積層と比較して堅密度が高いことから、締りのある土壌の選別、填圧などの作業により地盤整備を行ったものと推測する。なお、平成20年度の調査区において検出した焼土層や炭化米は、焼土層がわずかに検出できたのみである。柱穴や礎石など建物の存在を示す遺構は確認できなかった。整地層の西側、北側には流路、「沢状地形」などの自然地形が所在し、これらの自然地形を効果的に利用して周辺と比高差を確保したものと考えられる。

（４）「沢状地形」（図18～23、写真11）

規模・形状：調査前はヨシやササが繁茂しており、地形が判然としなかったことから、楕円形のくぼみ状の地形と考えていたが、除草後、沢状の地形であることが判明した。幅約５m、現地表面からの深さ約1.2mである。調査区外北西で第３調査区西側を第２調査区方向へ流れる用水路に合流する。

底面はほぼ平らで、内湾気味に立ち上がる。傾斜角は南側で約45°、北側で約25°である。

方位：N-61°-W

考察：平面形が方形に近いことから、人為的に掘削された溝状の遺構である可能性も考えたが、堀・柵列、整地層などと方位が一致せず、平成20年度調査区で検出された沢状地形と同様に南東—北西方位をとることから、自然地形の可能性が高いと判断した。整地層の北縁が沢状地形の上端に一致することから、自然地形を意識して整地層の構築がなされたことが伺える。

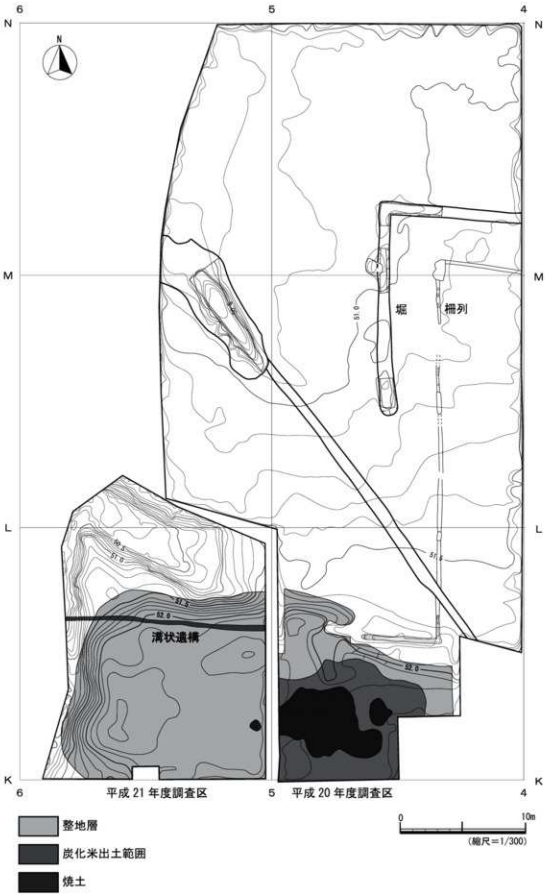


図18　第３調査区全体遺構配置図

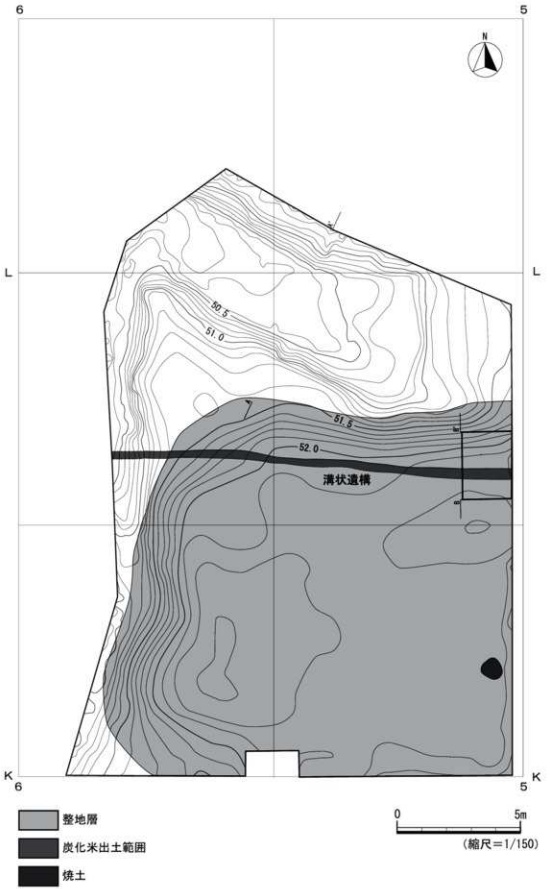
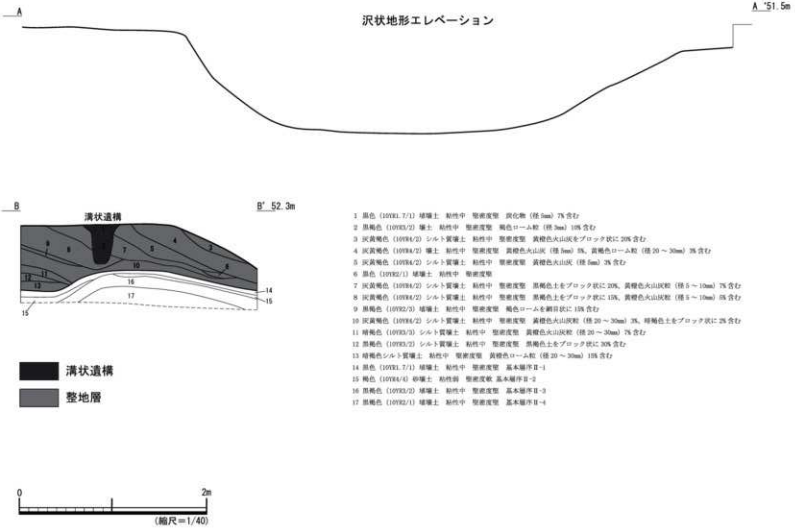


図19　第３調査区遺構配置図

図20　平成20・21年度第３調査区３次元現況地形図

図21　平成21年度第３調査区３次元現況地形図(北西から)

図22　平成21年度第３調査区３次元現況地形図(南東から)



1 黒色（10YR1.7/1）埴壌土　粘性中　堅密度堅　炭化物（径 5mm）7% 含む
2 黒褐色（10YR3/2）壌土　粘性中　堅密度堅　褐色ローム粒（径 3mm）10% 含む
3 灰黄褐色（10YR4/2）シルト質壌土　粘性中　堅密度堅　黄褐色火山灰をブロック状に 20% 含む
4 灰黄褐色（10YR4/2）壌土　粘性中　堅密度堅　黄橙色火山灰（径 5mm）5%、黄褐色ローム粒（径 20 ～ 30mm）3% 含む
5 灰黄褐色（10YR4/2）シルト質壌土　粘性中　堅密度堅　黄橙色火山灰（径 5mm）3% 含む
6 黒色（10YR2/1）埴壌土　粘性中　堅密度堅
7 灰黄褐色（10YR4/2）シルト質壌土　粘性中　堅密度堅　黒褐色土をブロック状に 20%、黄橙色火山灰粒（径 5 ～ 10mm）7% 含む
8 灰黄褐色（10YR4/2）シルト質壌土　粘性中　堅密度堅　黒褐色土をブロック状に 15%、黄橙色火山灰粒（径 5 ～ 10mm）5% 含む
9 黒褐色（10YR2/3）埴壌土　粘性中　堅密度堅　褐色ロームを網目状に 15% 含む
10 灰黄褐色（10YR4/2）シルト質壌土　粘性中　堅密度堅　黄橙色火山灰粒（径 20 ～ 30mm）3%、暗褐色土をブロック状に 2% 含む
11 暗褐色（10YR3/3）シルト質壌土　粘性中　堅密度堅　黄橙色火山灰粒（径 20 ～ 30mm）7% 含む
12 黒褐色（10YR3/2）シルト質壌土　粘性中　堅密度堅　黒褐色土をブロック状に 30% 含む
13 暗褐色シルト質壌土　粘性中　堅密度堅　黄橙色ローム粒（径 20 ～ 30mm）15% 含む
14 黒色（10YR1.7/1）埴壌土　粘性中　堅密度堅　基本層序Ⅱ-1
15 褐色（10YR4/4）砂壌土　粘性弱　堅密度軟　基本層序Ⅱ-2
16 黒褐色（10YR3/2）埴壌土　粘性中　堅密度堅　基本層序Ⅱ-3
17 黒褐色（10YR2/1）埴壌土　粘性中　堅密度堅　基本層序Ⅱ-4

図23　第3調査区沢状地形エレベーション及び溝状遺構・整地層断面

4．第４調査区（図24～29、写真13～18）

（１）調査区の概要（図24）

平成20年度第１調査区の成果とあわせて報告する。平成20年度の調査区は分岐した堀の西側が現況水路につながっていることから、この水路と堀との関係を確認することを目的として西側の調査区を設定した。平成19年度の調査により、現況水路とは別に現況の堀の延長上で北西方向に延びる堀を確認していたが、平成20年度の調査では、より直接的に堀と現況水路との関係を確認することとした。

平成20年度東側の調査区では、堀・土塁・柵列が良好に残存する箇所を選定し、館城跡の外郭線を構成する遺構の位置関係を確認することとした。平成20年度の調査の結果、堀・土塁・柵列が良好に残存することを確認したが、あわせて平成20年度調査区の南北に所在する堀・土塁の屈曲部における柵列の位置関係についても確認することとした。このことから、平成21年度は、平成20年度調査区の南北に調査区を設置し、屈曲部における堀・土塁・柵列の位置関係確認を行うこととした。

なお、図25～29のコンターは0.1m間隔である。

（２）平成20年度西側調査区（図25、写真13）

掘削対象は表土のみとし、土塁・堀への掘削は行っていない。堀及び現況水路は常に流水していることから、掘削を断念し平面でのみ切り合い関係を確認した。

規模・形状：土塁は検出面の基底部で幅約３m、検出面からの比高差は約0.4mである。堀の幅は検出面の開口部で約1.6m、現況の坑底で約0.2mである。現況水路は土塁が途切れるあたりで南寄りに方位を変え、西へのびる。堀は角度を変えず北西へ延び、平成19年度調査区で検出した堀（SD2）へとつながる。現況水路は堀の埋土を切って西へ延びる。

方位：土塁は検出範囲が狭いことから算出しない。堀はN-56°-W、現況水路はN-77°-Wである。

考察：堀の埋土を切っていることから、現況水路は館城跡の堀が埋没した後に掘削されたと判断できる。

（３）平成20・21年度柵列（図26～29、写真14～18）

表土及び耕作土除去後、土塁及び柵列の検出を行った。柵列は掘方全体を約10㎝掘り下げ、柱痕の検出を行った。図28では土塁基底部が柵列を覆っていたが、柵列柱痕を土塁基底部上で確認することができた。

規模・形状：掘方開口部の幅は検出面で約0.3m、深さ0.4mである。坑底は平らで、これまでのところ柱の打ち込まれた痕跡は確認できない。壁はほぼ垂直に直線的に立ち上がる。柱痕の検出面開口部の直径は小さいもので0.1m、大きいもので0.15mである。平面形は円形又は楕円形で、円形が多い。堀・土塁と並行し、２箇所で屈曲する。図26では約１mの開口部を確認した。

方位：北側ではN-82°-W、南北の屈曲間でN-10°-W、南側でN-71°-W、図29東端で再度方位を変えている可能性があるが計測不能。

土層：図28A-A'土層１は軟質の黒褐色土、２は締りのある黄橙色土、３～４は比較的締りのある黒褐色土、５～７は締まりのない黒褐色土で褐色～明黄褐色土をブロック状に含む。

考察：屈曲部においても、柵列が堀・土塁と並行することが確かめられた。柵列掘方を埋めるように堆積する土塁基底部上で柱痕を検出できたことから、柵列構築後、柵列の基部が消失する以前の期間に土塁崩落土などにより柵列基部が覆われたものと推測する。図28A-A'土層１は柵列柱痕、土層２は土塁の構成土の一部、土層３～７は掘方の埋め戻し土で、下位層ほど軟質となる。なお、平成20年度調査区で検出した柵列柱痕の残存木材２点の樹種同定の結果は、試料No.1（写真17）がニレ属、試料No.2 がカエデ属と同定されている。

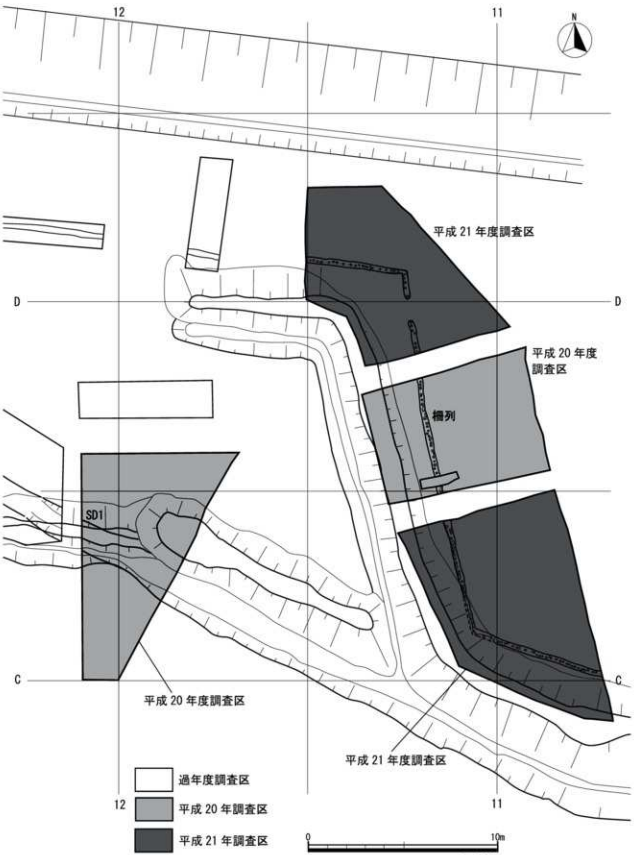


図24　第４調査区全体遺構配置図

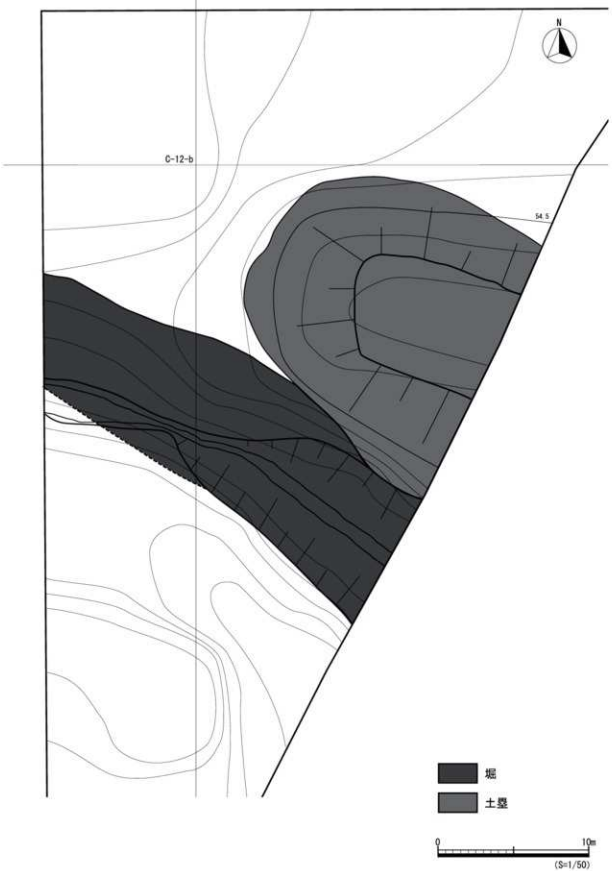


図25　第４調査区平成20年度西側調査区平面図

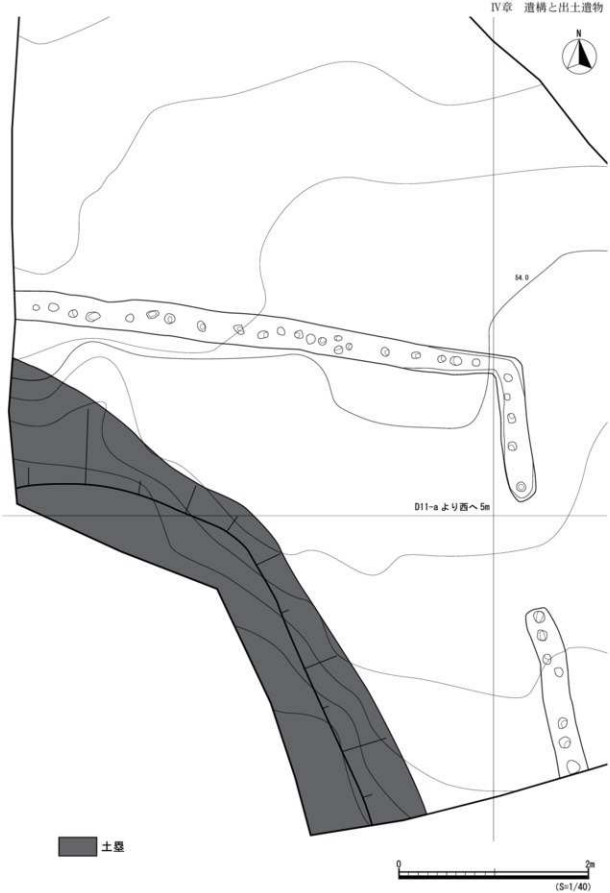


図26　第４調査区柵列平面図（１）

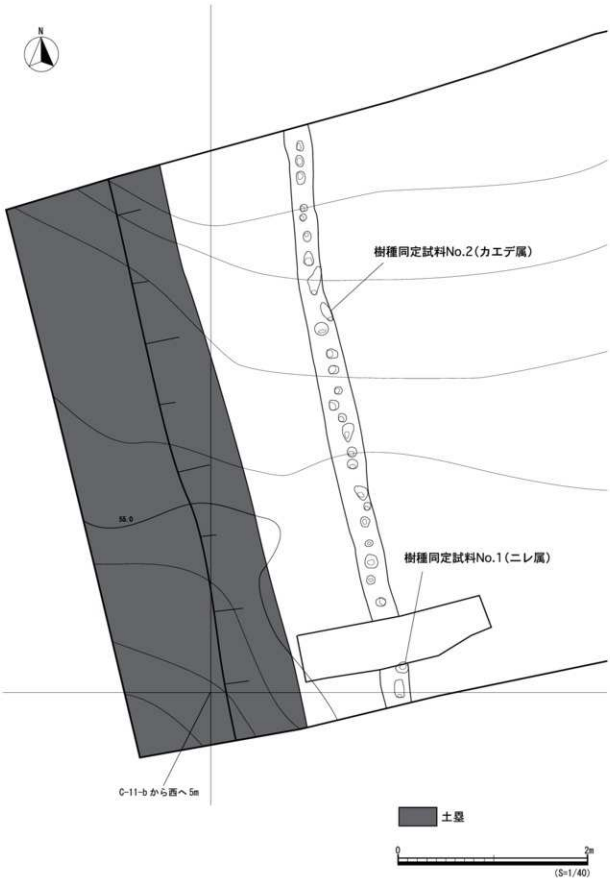


図27　第４調査区柵列平面図（２）

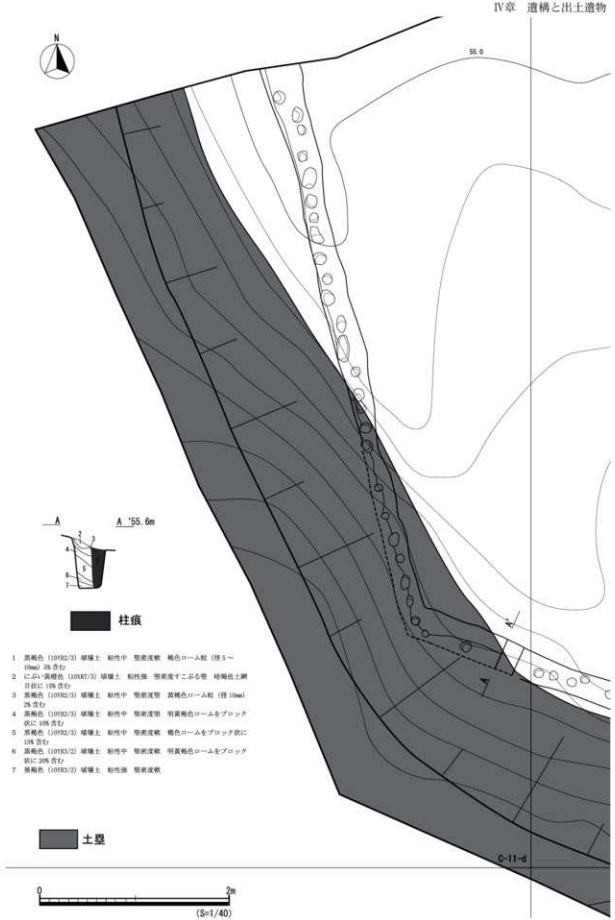


図28　第4調査区柵列平面図（3）

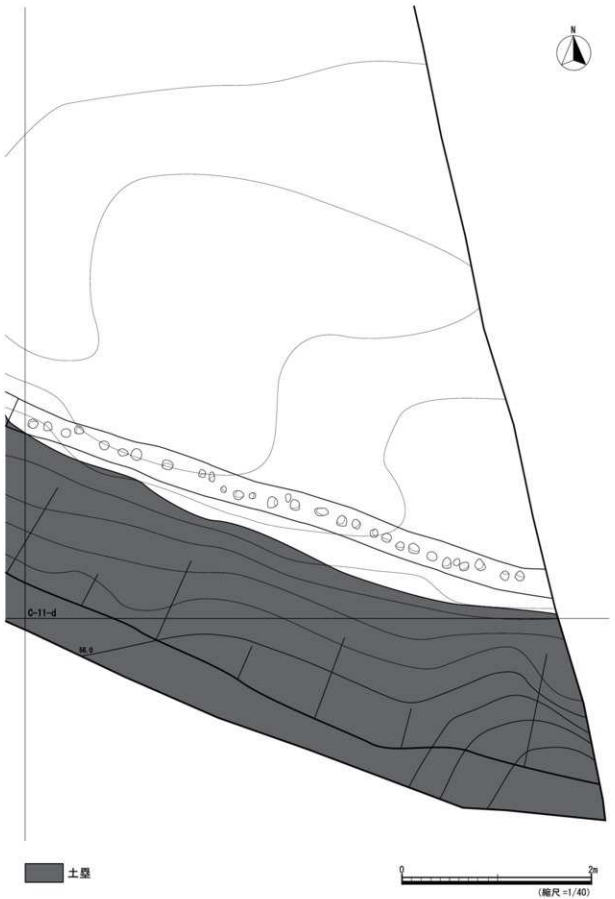


図29　第４調査区柵列平面図（４）

5．第５調査区（図30～34、付図１、２、写真19～21）

（１）調査区の概要（図１、図30）

館城跡の旧町有地（字城丘160、168-1、168-3）には礎石が残存することが知られており、これまでにも昭和39年、平成２年に配置確認調査が実施されてきた。また、江差町増田家が所有していた『増田家文書』中に「館築城圖」とされる建物図面があることが知られていたが、「現存する礎石の配置とは一致しない」とされてきた（厚沢部町教育委員会1989）。最後に行われた配置確認調査から20年が経過していることから、改めて礎石の残存状況を確認することを目的として調査を行った。

礎石の検出にはピンポールによる所在確認の後、礎石確認位置周辺の除草により検出した。地下への掘削は行っていない。

（２）礎石建物の概要（図30）

３棟の建物を復元し、「本丸建物１」、「本丸建物２」、「米倉建物」と仮称した。建物名称については、地域住民の呼称を踏襲したもので、建物の機能を意味しない。「本丸建物１」及び「本丸建物２」は隣接して位置することから、関連性の高い一連の建物であろう。「米倉建物」は、「本丸建物１」及び「本丸建物２」より一段低い平坦面に立地していることから、これらとは性格が大きく異なる建物と推測する。いずれの建物も柱間寸法の基準は６尺（約1.8m）である。

礎石の石質は、目視で確認した限りでは凝灰岩である。礎石表面は赤変し、薄い剥離が多く認められ、被熱の痕跡と判断した。

（３）「米倉建物」（図31、写真19）

規模・形状：南北に長軸をとり、桁行13間、梁行５間である。南面には半間の張り出しが付き、東面の南半にも同様の張り出しが付く。中央は１間幅で通路上に柱筋が通り、その左右（東西）にそれぞれ６～７間の「部屋」が配置される。

方位：N-３°-E

出土遺物：出土遺物の多くは東面の側柱に沿って出土した。器種は碗、段重、蓋付き鉢、すり鉢などである。

（４）「本丸建物１」（図32、34、写真21）

規模・形状：南北に長軸をとる。南側は道路敷地へと延びており、南端を確認することはできなかった。桁行は確認できる限り27間、梁行５間半である。南側では梁行が３間半となるが、礎石を検出しきれなかった可能性もある。建物中央には１間幅の通路上に柱筋が通り、建物北端から12間半のところ（Fライン付近）で半間西に筋を変える。通路の左右は２間四方ないし、長軸２間半短軸２間規模の部屋が並ぶ。西面の側柱筋に中心を置いて井戸跡がある。井戸跡の掘削は行っていない。

方位：N-５°-E

出土遺物：建物北側で多く出土している。器種は碗、碗蓋、合子蓋、急須、灯明皿、屏風側面金具などが出土した。

（５）「本丸建物２」（図33、34、写真20）

規模・形状：未検出の礎石が多く、建物全体の構造を把握し得ない。「本丸建物１」とは約５間（約９m）の距離があり、この間、礎石は確認されていない。建物はコの字型、又は回廊状となり、中庭を有する構造である可能性が考えられる。北側については、Gライン付近まで延びると考えられるが、まとまった礎石配置は確認できない。南端は、半間の張り出しが付く。

方位：N-５°-E

出土遺物：皿が１点出土している。

（6）『増田家文書』「館築城圖」との比較（図34、写真１）

掲載図は現地の礎石配置にあわせて、一棟の建物として描かれた図面を分割して掲載している。

「本丸建物１」に重ねた右半の建物には、「御寝所御居間」、「奥様御居間」などがあり、「本丸建物２」へつながる「御次」と「奥基子」との間に「御錠口」がみえることから、「奥御殿」相当する建物と考えられる。「本丸建物２」に重ねた左半の建物には、「御逢之間」があり、「御料理之間」やこれから「御逢之間」をつなぐ「召上物御通廊下」などがみえることから、城主の日常空間である「常御殿」に相当する建物と考えられる。「御逢之間」から、「御次」、「鷲之間」を経由して左手に延びる廊下には「御出座廊下　此通ヨリ御入側金ノ間夫ヨリ大広間江通ス」とあることから、「御出座廊下」を経て、左手（西側）にはさらに「金ノ間」、「大広間」などを含む建物が存在した可能性が考えられる。おそらく、「表御殿」に相当する建物であろう。

「本丸建物１」に相当する右半の建物は、検出した礎石配置と比較して、梁行で半間広いほか、いくつかの点で違いが見られるが、基本的な構造については一致しているとみることができる。また、礎石建物中央の通路状の通りを基準に図面を合わせた場合、東側に半間張り出す部分は「縁側」（くれ縁）として描かれていることから、母屋とは異なる基礎構造があったため、礎石が検出されなかった可能性も考えられる。

建物中央左側には「玄関奥御門」があり、これを挟んで上側（北側）では「老中格女中」、「御抱御乳部屋」、「御末女中部屋」などがみえることから、城主とその家族、身の回りの世話をする女性の居住空間であったことが分る。「玄関奥御門」の下側（南側）では南から「御寝所御居間」、「奥様御居間」、「若殿様御居間」が並び、城主とその家族の居住空間が描かれる。

また、風呂は４箇所描かれ、城主、奥方、若殿はそれぞれひとつずつ「御湯殿」が割り当てられ、女中連中は「女中風呂場」が割り当てられていたようである。

「本丸建物２」に相当する左半の建物は、礎石の検出が不十分なことから現段階で評価することは難しい。「御出座廊下」と「諸役人通廊下」との間の中庭的な空間が類似すること、北西方向へ延びる構造などに類似点がある。

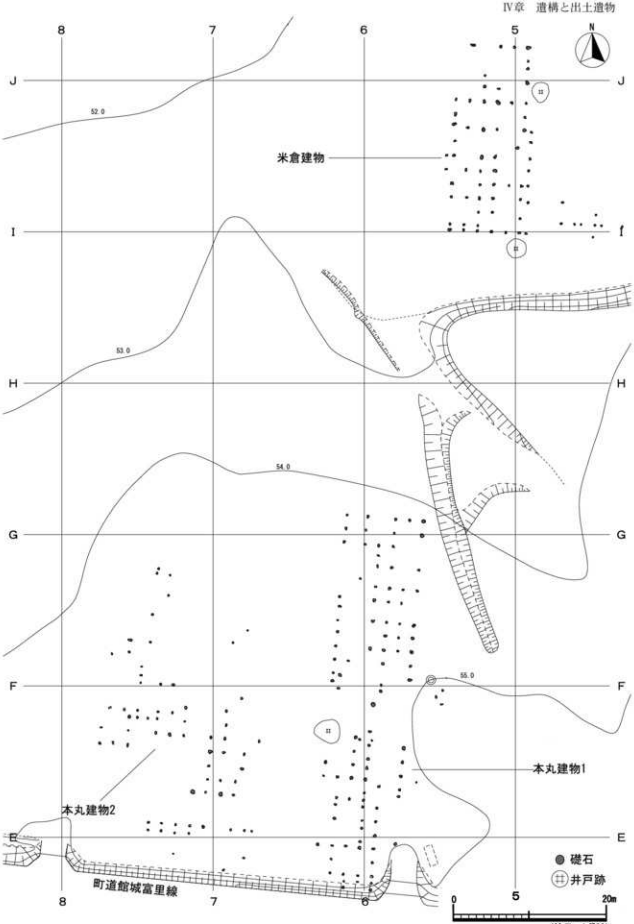


図30　第5調査区礎石建物配置全体図

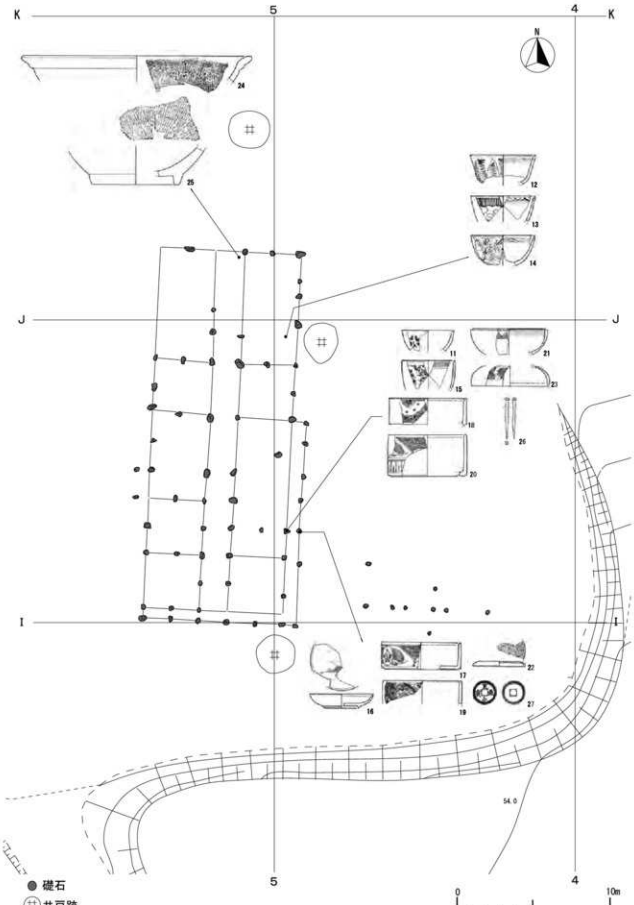


図31　第5調査区「米倉建物」平面図

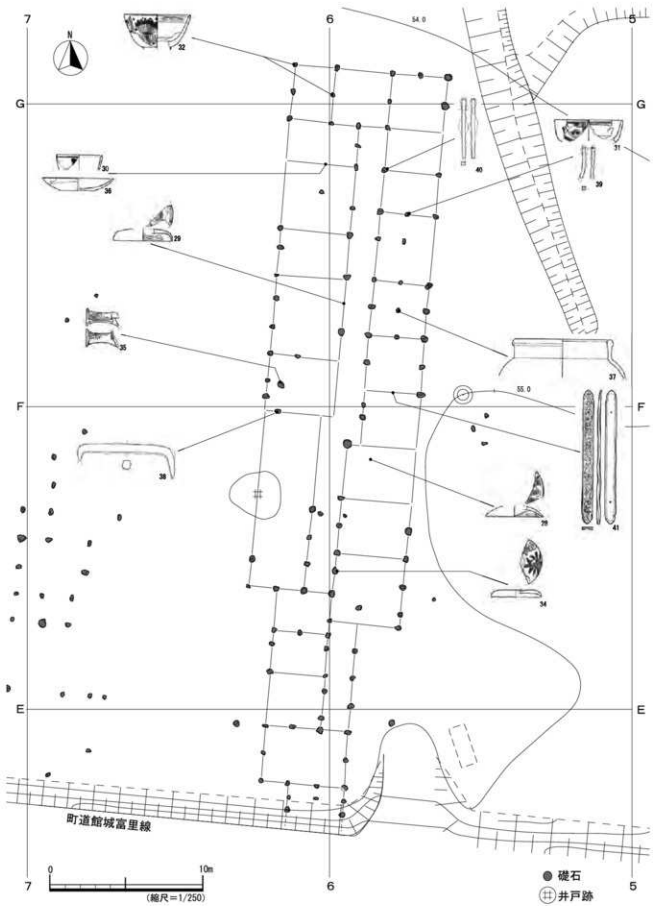


図32　第5調査区「本丸建物1」平面図

図33　第5調査区「本丸建物2」平面図

『増田家文書』「館築城圖」は、『櫻島一厚沢部町の歩み』（p371）掲載図を加筆の上、転載。

図34　第5調査区礎石建物『増田家文書』「館築城圖」との比較

6．遺構出土遺物及び包含層出土遺物（図35～37、写真22～26）

（1）平成20年度第4調査区出土遺物（図35、写真22）

1～5は全て磁器である。

1は碗蓋で外面に草花文、内面に「造」字がみえる。2～3は碗で、2は外面草花文、見込みに圏線が施される。3は外面草花文、見込みに圏線を施す。4～5は皿で、高台内を蛇目状に露胎し、見込みに山水が描かれる。

（2）第2－1、2－2調査区出土遺物（図35、写真23）

6～7は全て磁器である。

6は碗蓋で、内面見込に圏線を施し、内側に省略された山水風の図柄を描く。7は碗で外面は花文と波、口縁部内面に雷文を施す。8は波佐見産のいわゆる「筒徳利」である。

（3）第3調査区出土遺物（図35、写真24）

9は用途不明の筒状の銅製金具である。外面は六角柱状に面取され、内部は円筒状である。

（4）平成21年度第4調査区出土遺物（図35、写真24）

10は鉄製の釘である。釘頭は板状である。

（5）第5調査区「米倉建物」採集遺物（図36、写真25）

11～23は磁器、24～25は陶器である。

11～15は碗である。11は外面に桜花文を施す。12は外面に草葉文、口縁部内面に連続する短直線を施す。13は外面に縦縞と唐草文、口縁部内面に連弧文を施す。14は外面に花文と窓、口縁部内面に櫛垣文を施す。15は筒型に近い丸碗で、外面に花唐草文、口縁部内面に雷文を施す。16は丸皿で、見込には山水と思われる図柄が描かれる。17～20は段重である。17と20は対となる個体で、17が中段、20が基段である。17、20に描かれる図柄は共通で、外面は斜線で区画され、雲文と花唐草文が描かれ、窓内に花文が施される。加えて20では外面下位に方形の中に縦棒を引く連続文が施される。18は段重の中段で、外面に半菊花風の花文が施される。19は外面に草花文と花弁が描かれる。21～22は合子で、22が身、22～23が蓋で、21と23は対となる個体である。21、23は口縁部外面に連続する花文がめぐる。22は外面に徴塵唐草紋が施される。

24～25は同一個体の陶器製すり鉢である。口縁端部は折り返されて肥厚する。内外面とも錆釉が施される。卸目は上位で浅く不明瞭となる。

26は釘で、釘頭は薄く幕ように折り曲げられる。27は寛永通宝で、「寶」字の「貝」が「ハ字」となっていることから、寛文8（1668）年以降鋳造の、いわゆる「新寛永通宝」である。

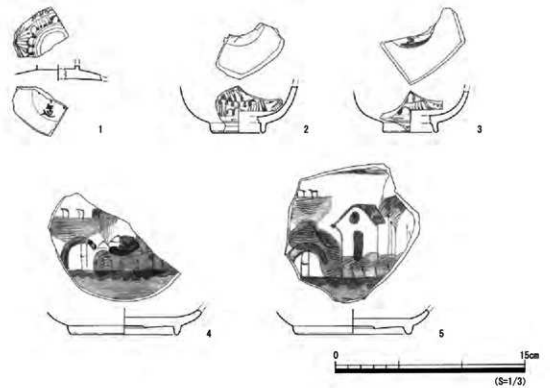
（6）第5調査区「本丸建物」採集遺物（図37、写真26）

28～35は磁器、36～37は関西系陶器、38～41は金属製品である。

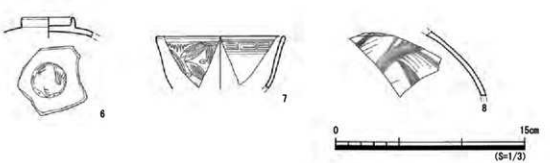
28～29は碗蓋で、28は外面に草葉文、口縁部内面に連続する短直線が施される。29は外面に山水、口縁部内面に櫛垣文を施す。30は丸碗である。31～32は端反碗で、31は外面に草花文、口縁部内面は連続する圏線が施される。32は外面に草花文、口縁部内面に連続する鋸歯状文が施される。33は皿で、高台内を蛇目状に露胎し、見込みに山水が描かれる。34は合子蓋で、外面に花文と「壽」の文字が描かれる。35は急須取手で蛸唐草文と青海波が描かれる。

36は灯明皿の受皿で、内面及び口縁部外面は灰釉が施され、外面体部下位と底部は露胎となる。37は信楽の壺で、口縁は折り返されて玉縁状となる。外面と口縁部内面に施釉され、内面は露胎となる。

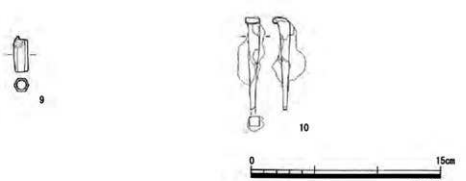
38は鎹である。39～40は釘で、釘頭を巻くように折り曲げるものである。41は銅製の屏風平金具で、表面には毛彫の花唐草文が施される。2箇所に目釘孔がある。



平成20年度第４調査区出土遺物



平成21年度２－１・２－２調査区出土遺物



平成21年度第３調査区出土遺物　　平成21年度第４調査区出土遺物

図35　第１調査区～第４調査区出土遺物

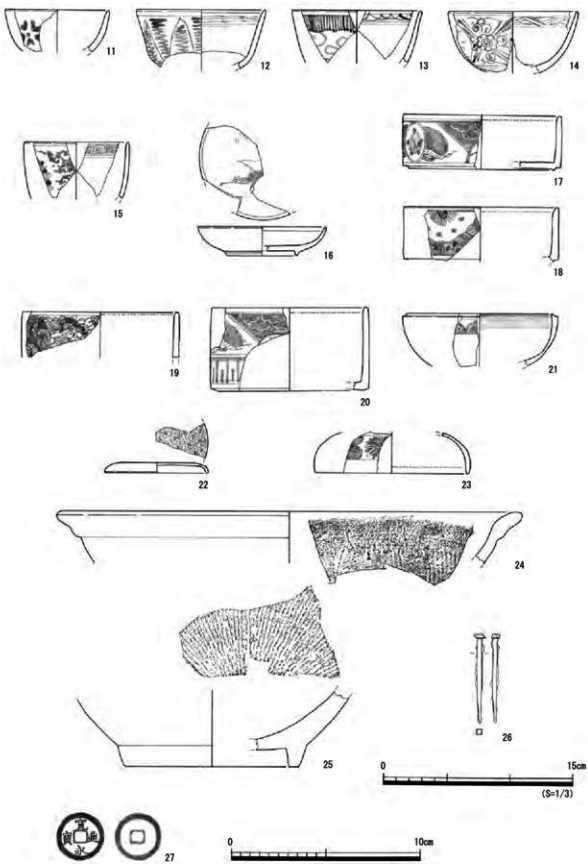


図36　第5調査区「米倉建物」採集遺物

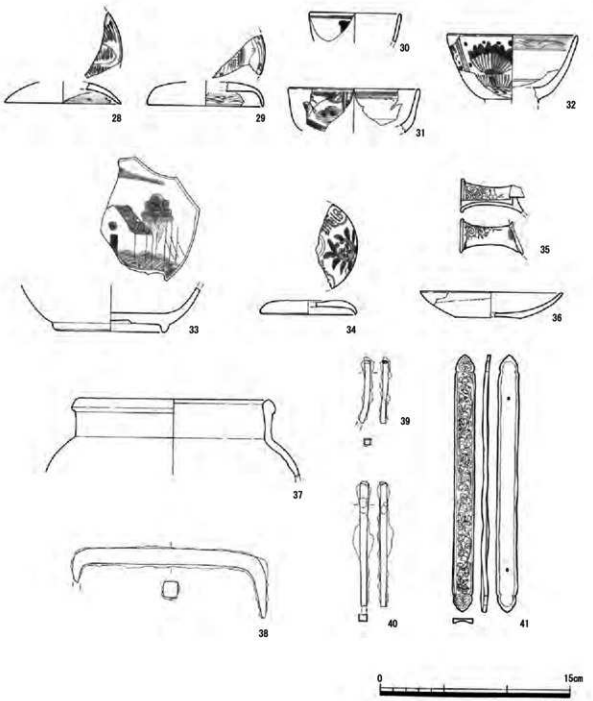


図37　第５調査区「本丸建物」採集遺物

表４　掲載遺物一覧（陶磁器）

掲載番号	写真	調査区	グリッド	層位	種類	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	備考
1	22	第４調査区H20	C-11-c	Ⅰ層	磁器	碗蓋				外面草花文、内面「造」字
2	22	第４調査区H20	C-11-b	Ⅰ層	磁器	碗		4.0		外面草花文、見込圏線
3	22	第４調査区H20	C-11-c	表採	磁器	碗		4.0		外面草花文、見込圏線
4	22	第４調査区H20	C-11-c	表採	磁器	皿		8.4		高台内蛇目状に露胎、見込に山水
5	22	第４調査区H20	C-11-a	Ⅱ層	磁器	皿		8.4		高台内蛇目状に露胎、見込に山水
6	23	2−2調査区	M-6-b	Ⅰ層	磁器	碗蓋		3.9		見込圏線内側に山水風の波と遠山
7	23	2−1調査区	O-11-a	Ⅰ層	磁器	碗		10.0		外面花文と波，口縁内面雷文
8	23	2−2調査区	M-6-b	Ⅰ層	磁器	瓶				外面笹文
11	25	第５調査区	米倉建物	表採	磁器	碗	8.0			外面桜花文
12	25	第５調査区	米倉建物	表採	磁器	碗	11.0			外面草葉文、内面口縁連続短直線
13	25	第５調査区	米倉建物	表採	磁器	碗	10.0			外面縦縞と唐草文、内面口縁連弧文
14	25	第５調査区	米倉建物	表採	磁器	碗	10.0			外面花文と窓、内面口縁櫛垣文
15	25	第５調査区	米倉建物	表採	磁器	碗	8.0			外面花唐草、内面口縁雷文
16	25	第５調査区	米倉建物	表採	磁器	皿	10.0	6.0	2.0	見込山水？
17	25	第５調査区	米倉建物	表採	磁器	段重	12.0	12.0	4.4	外面区画して雲文と花唐草、窓内花文
18	25	第５調査区	米倉建物	表採	磁器	段重	12.0	12.0	4.2	外面平菊花風花弁
19	25	第５調査区	米倉建物	表採	磁器	段重	12.0	12.0		外面草花文と花弁
20	25	第５調査区	米倉建物	表採	磁器	段重	12.0	12.0	6.5	外面区画して雲文と花唐草、窓内花文，外面下位棒状連続文
21	25	第５調査区	米倉建物	表採	磁器	合子	12.0			外面口縁連続する花文
22	25	第５調査区	米倉建物	表採	磁器	合子	8.0			外面微塵唐草文
23	25	第５調査区	米倉建物	表採	磁器	合子蓋	12.0			外面口縁連続する花文
24	25	第５調査区	米倉建物	表採	陶器	すり鉢	36.0			
25	25	第５調査区	米倉建物	表採	陶器	すり鉢		13.0		
28	26	第５調査区	本丸建物	表採	磁器	碗蓋	9.0			外面草葉文、内面口縁連続短直線
29	26	第５調査区	本丸建物	表採	磁器	碗蓋	9.0			外面山水、内面口縁櫛垣文
30	26	第５調査区	本丸建物	表採	磁器	碗	7.0			
31	26	第５調査区	本丸建物	表採	磁器	碗	10.0			外面草花文、口縁圏線
32	26	第５調査区	本丸建物	表採	磁器	碗	10.0			外面草花文、内面口縁鋸歯状文
33	26	第５調査区	本丸建物	表採	磁器	皿		8.0		高台内蛇目状に露胎、見込に山水
34	26	第５調査区	本丸建物	表採	磁器	合子蓋	7.5			外面花文と「壽」字
35	26	第５調査区	本丸建物	表採	磁器	急須				外面蛸唐草文と青海波
36	26	第５調査区	本丸建物	表採	関西系陶器	灯明皿	11.0			
37	26	第５調査区	本丸建物	表採	関西系陶器	壺	15.0			口縁折返玉縁状

表５　掲載遺物一覧（金属製品）

掲載番号	写真	グリッド	層位	種類	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	備考
9	24	K-5-b	整地層	金属製品	不明		1.1	1.1	毛彫草花
10	24	D-11-a	Ⅰ層	鉄製品	釘	7.2	0.9	0.8	
26	25	米倉建物	表採	鉄製品	釘	7.0	0.5	0.4	
35	25	米倉建物	表採	銭	寛永通宝	2.5	2.5	0.1	新寛永通宝
38	26	本丸建物	表採	鉄製品	鎹	15.9	1.5	1.2	
39	26	本丸建物	表採	鉄製品	釘		0.6	0.4	
40	26	本丸建物	表採	鉄製品	釘		0.6	0.6	
41	26	本丸建物	表採	金属製品	屏風平金具	20.2	1.6	0.3	毛彫花唐草文

表６　平成21年度出土遺物集計表

種別	器種	法量	点数
磁器			232
	碗蓋		22
	碗		61
		6cm	1
		8cm	3
		10cm	9
		12cm	8
		不明	40
	筒型碗		1
	皿		22
	輪花皿		22
	鉢		3
	段重		29
	合子蓋		7
	合子		1
	蓋類		6
	急須		1
	花瓶		1
	香炉		6
	瓶		19
	不明		31
関西系陶器			57
	土瓶		20
	灯明皿		6
	鉢		14
	瓶		4
	壺		9
	不明		4
陶器			32
	すり鉢		24
	甕		6
	不明		2
金属製品			12
	釘		7
	鎹		1
	その他		1
	不明		3
銭貨			1
	寛永通宝		1
土製品			83
	珪藻土		76
	不明		7
近代磁器			59
	碗		26
	皿		30
	瓶		2
	不明		1
その他			14
	ガラス		12
	フレイク		2
総計			490

Ⅴ章　自然科学的分析

1　厚沢部町館城跡のテフラ分析

藤根　久（パレオ・ラボ）

（1）はじめに

館城跡の調査では、自然流路が確認され、土層中からテフラが検出された。ここでは、このテフラ層について鉱物組成およびガラスの屈折率測定を行い、テフラの同定を行った。

（2）試料と分析方法

試料は、自然流路の土層14（基本層序Ⅱ−2層）から採取されたテフラ層１試料である（表１）。分析は、鉱物組成の分析と火山ガラスの屈折率測定を行った。以下に、その分析方法を示す。

表１　テフラ分析を行った試料とその詳細

試料No.	位　置	層　位	特　　徴	備考（調査所見）
1	自然流路	土層14（基本層序Ⅱ−2層）	軽石混じり黒褐色砂質粘土（10YR 3/2）	B-Tm または Ko-C_2

a．鉱物組成

各テフラ試料は、自然含水状態で約40g程度秤量し、1φ（0.5mm）、2φ（0.25mm）、3φ（0.125mm）、4φ（0.0063mm）の篩を用いて湿式篩分けを行い、乾燥した後秤量した。なお、試料の乾燥重量中における粒径4φ以上の砂粒分の重量％を含砂率とした。2φ残渣は、実体顕微鏡を用いて、テフラ粒子の特徴について観察・記載した。

3φ残渣について、重液（テトラブロモエタン、比重2.96）を用いて重鉱物と軽鉱物に分離し、乾燥後秤量した。軽鉱物および重鉱物は、水浸プレパラートを作製し、偏光顕微鏡下で鉱物粒子を同定・計数した。なお、重鉱物は、単斜輝石、斜方輝石、角閃石、磁鉄鉱、不明粒子に分類した。また、軽鉱物は、雲母類、石英、長石類、火山ガラスに分類し、火山ガラスは町田・新井（2003）の分類基準（平板状（b1）、Y字状（b2）、繊維状（p1）、スポンジ状（p2）、破砕型（o0））に従って分類した。なお、ガラスは電子顕微鏡で観察し、写真を撮影した。

b．火山ガラスの屈折率測定

火山ガラスの屈折率については、横山卓雄ほか（1986）に従い、温度変化型屈折率測定装置を用いて屈折率（n）を測定し、範囲（range）と平均（mean）を示した。

（3）結果

a．テフラの特徴と火山ガラス屈折率および同定結果

以下に、採取されたテフラ試料の肉眼および実体顕微鏡による特徴、テフラ分析による鉱物組成および火山ガラスの屈折率測定結果を述べる。

試料は、軽石混じり黒褐色砂質粘土（10YR 3/2）である。粗粒物（2φ篩の残渣）の実体顕微鏡

表２　テフラ試料の篩分け結果

試料No.	乾燥重量 (g)	含砂率 (重量%)	砂粒分の粒度組成（重量g）				砂粒分の粒度組成（重量%）			
			1φ	2φ	3φ	4φ	1φ	2φ	3φ	4φ
1	23.47	11.30	0.40	3.80	5.80	1.30	3.54	33.63	51.33	11.50

観察では、白色の軽石からなる（図版1−1）。粒度組成は、2φおよび3φ粒子が全体の約80%を占める（表２）。なお、軽石の最大粒径は1.5㎜前後である。3φ粒子の鉱物組成は、軽鉱物ではガラスが付着した長石が多く、火山ガラスは軽石型のスポンジ状ガラスが多く、繊維状ガラスを少量含む（図表３、図１、版1−2～４）。重鉱物ではガラスが付着した斜方輝石や磁鉄鉱が多く、単斜輝石を含む（表３、図１、図版1−5～６）。軽石型ガラスの屈折率測定では、範囲1.5006−1.5053、平均1.5030であった（図２）。このテフラは、鉱物組成および火山ガラスの特徴あるいは屈折率測定結果から、駒ケ岳C2テフラ（Ko-C2）と同定される。

表３　テフラ層（３φ粒子）の軽鉱物および重鉱物組成

試料No.	軽鉱物（粒数）									重鉱物（粒数）						
				火山ガラス												
	雲母類	石英	長石類	平板状	Y字状	繊維状	ｽﾎﾟﾝｼﾞ状	破砕型	合計	不明	合計	単斜輝石	斜方輝石	角閃石	磁鉄鉱	ｶﾝﾗﾝ石	不明	合計
1			163				17			20	200	42	95		62		1	200

図１　各テフラの含砂率・粒度組成・鉱物組成、火山ガラス分布図

駒ケ岳C2テフラ（Ko-C2）は、AD1694年に駒ケ岳火山から噴出した降下軽石および火砕流堆積物である。火山灰は東北東方向に350㎞以上に及ぶ。軽石中の主な鉱物は、単斜輝石と斜方輝石である。火山ガラスの屈折率（n）は、軽石型ガラスにおいて1.501−1.505、斜方輝石の屈折率（γ）は1.709−1.713である（町田・新井，2003）。

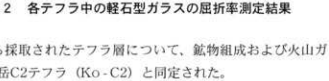


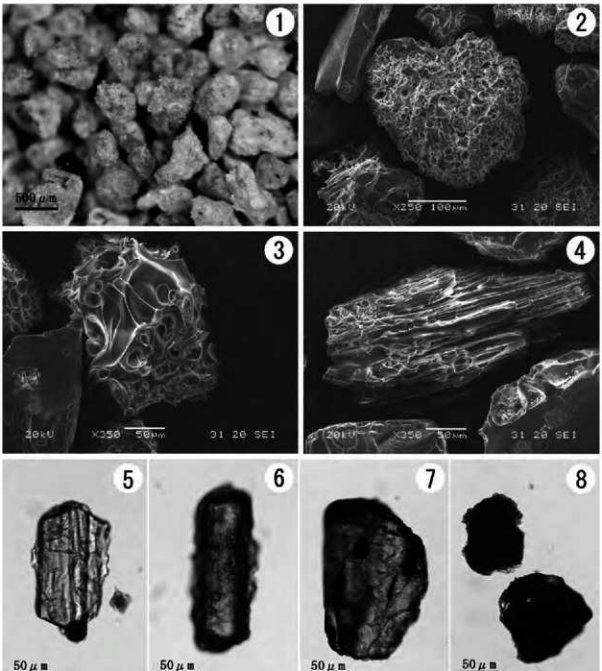
図２　各テフラ中の軽石型ガラスの屈折率測定結果

（４）おわりに

自然流路の土層14（基本層序Ⅱ−2層）から採取されたテフラ層について、鉱物組成および火山ガラスの屈折率測定を行った。その結果、駒ケ岳C2テフラ（Ko-C2）と同定された。

引用文献

町田 洋・新井房夫（2003）新編　火山灰アトラス，336p，東京大学出版会
横山卓雄・檀原 徹・山下 透（1986）温度変化型屈折率測定装置による火山ガラスの屈折率測定．第四紀研究，25,21−30.



図版1　テフラ試料の顕微鏡写真（1：実体顕微鏡，2–4：電子顕微鏡，5–8：偏光顕微鏡）
1.2φ残渣の　2–3.3φ軽石型スポンジ状ガラス　4.3φ軽石型繊維状ガラス
5–6.3φガラス付着斜方輝石　7．単斜輝石　8．ガラス付着磁鉄鉱

2　厚沢部町館城跡の花粉化石

鈴木　茂（パレオ・ラボ）

（1）はじめに

館城跡において行われた平成21年度発掘調査で、明治期以降の人為的な堆積層の下位に認められた自然堆積層より土壌試料が採取された。以下にこの土壌試料を用いて行った花粉分析の結果を示し、遺跡周辺の古植生について検討した。

（2）試料と分析方法

試料は2−2調査区の自然堆積層（基本層序Ⅱ−1層に相当）より採取された２試料（No.1, No.2）である（図１）。各試料について、No.1（12層）はやや土壌化が進んだ黒色土壌で、直上の２～11層は明治期以降に農地造成のために流路を埋め戻した人為的な堆積層である。No.2（13層）はやや泥炭質の黒色土壌で、細かな根状の植物遺体が散在しており、砂も少し認められる。本層直下の14層は火山灰層で、火山灰分析の結果、1694年に噴出した駒ケ岳c2テフラと同定されている（火山灰分析の節参照）。花粉分析はこれら２試料について以下のような手順に従って行った。

試料（湿重約５ｇ）を遠沈管にとり、10% の水酸化カリウム溶液を加え20分間湯煎する。水洗後、0.5㎜目の篩にて植物遺体などを取り除き、傾斜法を用いて粗粒砂分を除去する。次に46% のフッ化水素酸溶液を加え20分間放置する。水洗後、比重分離（比重2.1に調整した臭化亜鉛溶液を加え遠心分離）を行い、浮遊物を回収し、水洗する。水洗後、酢酸処理を行い、続けてアセトリシス処理（無水酢酸9：1濃硫酸の割合の混酸を加え３分間湯煎）を行う。水洗後、残渣にグリセリンを加え保存用とする。検鏡はこの残渣より適宜プレパラートを作製して行い、その際サフラニンにて染色を施した。

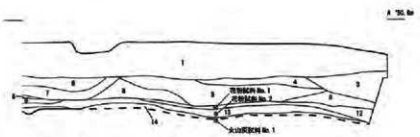


図１　試料採取地点付近の土層断面と試料採取層準

（3）分析結果

検出された花粉・胞子の分類群数は樹木花粉29、草本花粉27、形態分類を含むシダ植物胞子４の総計60である。これら花粉・シダ植物胞子の一覧を表１に、それらの分布を図２に示した。なお分布図の樹木花粉は樹木花粉総数を、草本花粉・シダ植物胞子は全花粉胞子総数を基数とした百分率で示してある。また図や表においてハイフン（−）で結んだ分類群はそれら分類群間の区別が困難なものを示しており、クワ科・バラ科・マメ科の花粉には樹木起源と草本起源のものとがあるが、各々に分けることが困難なため便宜的に草本花粉に一括して入れてある。

検境の結果、樹木花粉ではコナラ属コナラ亜属が最も多く検出され、出現率は20～30％を示している。次いでブナ属が多く、No.2では20% に達している。また、同試料においてマツ属複維管束亜

属（アカマツ、クロマツなどのいわゆるニヨウマツ類）とカバノキ属が10%を越えて検出されており、その他、スギ、クマシデ属－アサダ属、ハンノキ属、ニレ属－ケヤキ属、カエデ属、トチノキ属、ウコギ科などが５％前後の出現率を示している。草本類の占める割合は高く、No.2では約64%を占めている。その中ではイネ科が最も多く、No.2では30%を越えている。次いでヨモギ属が多く、20%弱の出現率を示している。その他、ソバ属が少ないながら２試料で観察されており、好水性のミズバショウ属やツリフネソウ属、アカバナ属、道端雑草のオオバコ属などが検出されている。

（４）遺跡周辺の古植生

試料の時期は、駒ケ岳c2テフラが噴出した1694年から明治期の期間と考えられる。この時期の館城跡2−2調査区には流路が存在しており、水辺やその周辺にミズバショウ属やガマ属、ツリフネソウ属、アカバナ属などが生育していたとみられる。また、その土手部にはイネ科、ヨモギ属、カヤツリグサ科、アカザ科、ヒユ科、ツユクサ属、ギシギシ属、イタドリ節などの雑草類が群落を形成していたと推測される。さらに、ハンノキ属、ヤナギ属、クルミ属、ウコギ科などの樹木類も土手の一部地域に生育していたとみられる。この流路の周辺においてソバ畑の存在も推測され、道端雑草のオオバコ属などが畑周辺に生育していたとみられる。一方、遺跡周辺丘陵部にはコナラ亜属を中心にクマシデ属－アサダ属、カバノキ属、ブナ属、ニレ属－ケヤキ属などが生育する落葉広葉樹林が成立していたと推測される。またスギ、トチノキ属、シナノキ属などが丘陵の斜面部を中心に生育していたとみられる。さらにニヨウマツ類の二次林も一部地域に成立していたと推測される。

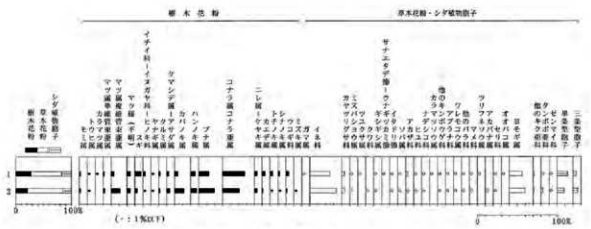
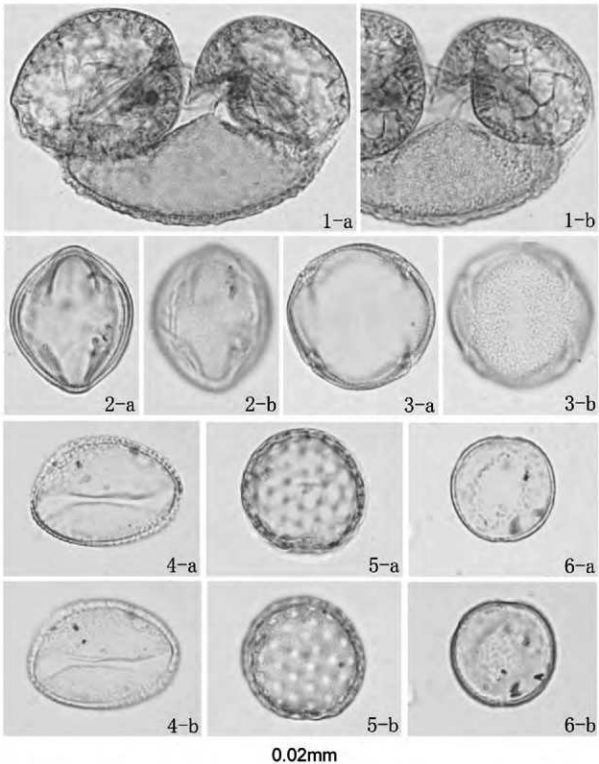


図２　館城跡２－２調査区の花粉化石分布図
（樹木花粉は樹木花粉総数、草本花粉・胞子は花粉・胞子総数を基数として百分率で算出した）

表1　産出花粉化石一覧表

和名	学名	1	2
樹木			
モミ属	*Abies*	4	4
トウヒ属	*Picea*	2	1
カラマツ属	*Larix*	1	–
マツ属単維管束亜属	*Pinus* subgen. *Haploxylon*	3	5
マツ属複維管束亜属	*Pinus* subgen. *Diploxylon*	8	26
マツ属（不明）	*Pinus* (Unknown)	10	10
スギ	*Cryptomeria Japonica* D. Don	17	7
イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科	T.－C.	7	1
ヤナギ属	*Salix*	1	1
ヤマモモ属	*Myrica*	–	1
クルミ属	*Juglans*	4	3
クマシデ属－アサダ属	*Carpinus* – *Ostrya*	8	9
ハシバミ属	*Corylus*	1	–
カバノキ属	*Betula*	9	27
ハンノキ属	*Alnus*	13	17
ブナ属	*Fagus*	29	45
コナラ属コナラ亜属	*Quercus* subgen. *Lepidobalanus*	62	48
ニレ属－ケヤキ属	*Ulmus* – *Zelkova*	9	9
キハダ属	*Phellodendron*	1	–
ユズリハ属	*Daphniphyllum*	1	–
ニシキギ科	Celastraceae	1	–
カエデ属	*Acer*	9	3
トチノキ属	*Aesculus*	8	1
シナノキ属	*Tilia*	5	1
マタタビ属近似種	cf. *Actinidia*	1	1
ウコギ科	Araliaceae	8	3
ミズキ属	*Cornus*	–	1
イボタノキ属	*Ligustrum*	–	1
ガマズミ属	*Viburnum*	1	–
草本			
ガマ属	*Typha*	1	–
イネ科	Gramineae	202	353
カヤツリグサ科	Cyperaceae	20	41
ミズバショウ属	*Lysichiton*	5	1
ツユクサ属	*Commelina*	3	–
クワ科	Moraceae	–	1
ギシギシ属	*Rumex*	7	4
サナエタデ節－ウナギツカミ節	*Polygonum* sect. Persicaria-Echinocaulon	1	–
イタリ節	*Polygonum* sect. Reynoutria	3	1
ソバ属	*Fagopyrum*	1	6
アカザ科	Chenopodiaceae	19	5
ヒユ科	Amaranthaceae	5	1
ナデシコ科	Caryophyllaceae	1	3
カラマツソウ属	*Thalictrum*	1	–
他のキンポウゲ科	other Ranunculaceae	4	2
アブラナ科	Cruciferae	1	1
ワレモコウ属	*Sanguisorba*	1	1
他のバラ科	other Rosaceae	1	1
マメ科	Leguminosae	7	1
ツリフネソウ属	*Impatiens*	2	–
アカバナ属	*Epilobium*	–	1
セリ科	Umbelliferae	6	10
オオバコ属	*Plantago*	4	–
ツルニンジン属	*Codonopsis*	–	1
ヨモギ属	*Artemisia*	130	210
他のキク亜科	other Tubuliflorae	10	13
タンポポ亜科	Liguliflorae	5	22
シダ植物			
ヒカゲノカズラ属	*Lycopodium*	–	1
ゼンマイ科	Osmundaceae	4	3
単条型胞子	Monolete spore	105	93
三条型胞子	Trilete spore	31	62
樹木花粉	Arboreal pollen	221	295
草木花粉	Nonarboreal pollen	449	679
シダ植物胞子	Spores	140	189
花粉・胞子総数	Total Pollen & Spores	807	1063
不明花粉	Unknown pollen	37	18

T.－C.はTaxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceaeを示す



図版　館城跡の花粉化石

1：マツ属複維管束亜属　PLC.SS 4974　No.1
2：バラ科　PLC.SS 4972　No.1
3：ギシギシ属　PLC.SS 4975　No.1
4：ミズバショウ属　PLC.SS 4976　No.1
5：アカザ科　PLC.SS 4971　No.1
6：オオバコ属　PLC.SS 4973　No.1

Ⅵ章　調査のまとめ

1．史跡外西側の堀・柵列（第１調査区の成果）

平成18年度の調査の結果、館城跡西辺の堀は西へ方位を変え、史跡外へ延びることが明らかになった。今年度は、史跡外西側、町道「上館城ノ岱線」西側の農地に調査区を設定し、史跡外へ延びる堀・柵列の検出を行った。

調査の結果、堀・柵列を検出することができなかった。このことから、館城跡西辺の堀・柵列は町道「上館城ノ岱線」道路敷地内で屈曲し、町道敷地内を町道と並行して北へ延びるものと推測する。

町道に沿って設定したサブトレンチ３～５では町道拡幅以前の旧用水路を検出した。底面に重機の爪痕が残っていることから、戦後に掘削が行われたことは明らかであるが、館城跡の堀が踏襲された可能性も残る。今後の調査によって検証する必要がある。

2．北辺の堀・柵列の所在（第２調査区の成果）

館城跡史跡内北側を流れる用水路が、館城築城時には自然の流路として何らかの区画の機能を果たしていた可能性を検証するために、流路の規模や形状の確認、流路周辺の遺構検出を目的として、２箇所の調査区を設定した。

2−1調査区、2−2調査区ともに遺構を検出することはできず、流路と館城との関係を積極的に裏付ける証拠は確認できない。

町道「上館城ノ岱線」東側に隣接する2−1調査区では、流路は調査区中央で入江状に広がり、低湿地を形成する。重機を使用した埋立が行われており、戦後、農地開発等に伴って、低湿地が埋め戻され、現在の景観が形成されたものである。

第３調査区に隣接する2−2調査区でも同様に流路を検出した。2−1調査区と同様、埋立が行われており、本来は幅６～８ｍの自然の流路である。人為堆積層除去後の流路底面は現地表面から約0.7ｍでほぼ平らな断面となることから、当時の水流はそれほど強くなかったと推測でき、2−1調査区同様、湿地状の景観だったようである。

駒ケ岳C2火山灰と同定された（Ⅴ章第１節参照）火山灰層より上位２層の自然堆積層（図17土層12～13）から採取した土壌試料を用いて花粉分析を行った（Ⅴ章第２節参照）。試料採取土層は、駒ケ岳C2火山灰降灰年代の1694年から流路埋立以前に形成された堆積層であることから、館城築城時の生活面が含まれる。

花粉分析の結果、土層12、13採取試料はいずれもコナラ属コナラ亜属が最も多く、次いでブナ属が多く検出され、「遺跡周辺丘陵部にはコナラ亜属を中心にクマシデ属－アサダ属、カバノキ属、ブナ属、ニレ属－ケヤキ属などが生育する落葉広葉樹林が成立していた」（Ⅴ章第２節）と推測される。平成18年度調査の西辺の堀底採取試料、平成20年度調査の北東部の堀底採取試料においても類似する分析結果が確認されている。

また、平成20年度に引き続きソバ属が検出されことから、「流路の周辺においてそば畑の存在も推測され」る。今後、年代を特定できる試料の採取を試み、館城築城時の栽培植物の有無を明らかにしたい。

3．北東部の柵列、整地層（第３調査区の結果）

平成20年度調査において検出された柵列の延長及び、整地層の範囲を確認するために、平成20年度調査区に隣接して調査区を設定した。

平成20年度調査区検出の柵列の西側延長上で確認した「溝状遺構」は、柱痕が確認できないことから現時点で柵列とは断定できないが、整地層の北縁に並行すること、平成20年度柵列の延長上に精確に位置することから、何らかの区画施設の痕跡と判断する。

整地層は西側を2−2調査区へ続く水路と沢状地形によって西側と北側を遮断され、これらとの比高差を活かして平坦面を構築したものである。平成20年度の調査では焼土層、炭化米が検出されたが、今年度の調査では小規模な焼土が検出されたのみである。

平成20年度調査区と同様、柱穴や礎石、礎石の抜き取り痕などは検出できなかったことから、少なくとも調査区内においては、建物の構築が行われなかったと結論付ける。

調査区域周辺は「米倉跡」と地域住民によって呼称されており、調査によって炭化米や焼土層、釘など建物の存在をうかがわせる痕跡や遺物の出土があったが、これらは、別の場所にあった建物の部材や収納物を「火事場整理」的に調査区周辺へ廃棄した結果であった可能性が高まった。後述する第５調査区礎石建物跡の位置づけと併せて調査区周辺空間の機能を推測していきたい。

4．南西部の堀・土塁・柵列（第４調査区の成果）

平成20年度及び21年度調査の成果をあわせて報告した。

堀・土塁・柵列が最も良好に残存する箇所を選定し、館城跡外郭線の構造を確認した。調査区域は館城跡南西部で、堀・土塁がクランク状に屈曲する箇所で、柵列は堀の内側を真芯距離で約４mのところを堀・土塁と並行して位置することが確認できた。

平成21年度調査区の堀・土塁・柵列が城内側に屈曲する箇所では、柵列埋土上位を土塁構築土が覆う状況が確認できた。柵列柱痕が土塁構築土上面で確認できたことから、柵列構築後に、柵列基部が土塁構築土で埋められたものである。土塁構築後の崩落によるものか、土塁構築時に行われたものなのかは判断できなかった。いずれにせよ、土塁と柵列の間は極めて近距離であったことを示すものである。

平成20年度調査区で検出された柵列柱痕の木材２点を樹種同定したところ、ニレ属とカエデ属と同定された。樹種同定の成果についてはすでに報告したところであるが（厚沢部町教育委員会2009）、平成20年度北東部の調査区で検出された柵列柱痕の木材がニレ属であり、昭和63年度調査出土の柵列柱痕が「ナラ、セン」と鑑定されていることから、館城跡の柵列に用いられた部材の樹種は一定ではなく、また、広葉樹が主体的に使用された可能性がある。

5．礎石建物跡（第５調査区の成果）

（1）「米倉建物」

第５調査区で検出された礎石建物は大きく２群に分けられ、北に位置する「米倉建物」と南に位置する「本丸建物」がある。「本丸建物」は、さらに「本丸建物１」、「本丸建物２」の２棟の建物とした。

「米倉建物」は、桁行13間、梁行５間の建物で、南面と東面に半間の張り出しが付く。中央通路の左右に部屋が配置される構造である。北海道大学附属図書館所蔵の『藤枝家文書』「館城略図」には「五間　十五間　米倉」の注記のある建物と、「二十間　十間　賄部屋」の注記のある建物が描かれる。この中で「米倉」とされる建物が、検出された「米倉建物」の規模に最も近い。

出土遺物をみると、食膳具を中心とした陶磁器類が多く出土しており、その内容は「本丸建物」出土の陶磁器類と大きな差がないことから、本建物の性格については今後の検討課題である。

（2）「本丸建物」

「本丸建物１」と「本丸建物２」からなり、特に「本丸建物１」は『増田家文書』「館築城圖」とよく一致する。「館築城圖」については、原本は所在不明で、厚沢部町教育委員会の所有する写本が現在確認できる唯一の写本である。

「館築城圖」では「本丸建物１」と「本丸建物２」に相当する建物が一棟の建物として描かれており、「本丸建物１」と「本丸建物２」間の礎石確認調査を念入りに行ったが、礎石や礎石の抜き取りの痕跡も確認できなかったことから、２棟の建物と判断した。

「本丸建物２」については礎石の検出が不十分で、建物を復元するに至っていない。

採集遺物の大半は「本丸建物１」からである。「館築城圖」では「本丸建物１」に相当する建物が城主とその家族の生活空間である「奥御殿」、その西側につながる「本丸建物２」に相当する建物が、城主の日中の居所である「常御殿」と推測できることから、より内向きの日常的空間である「本丸建物１」から多くの遺物が採取できたことは「館築城圖」の記載とも整合性がある。

今回の調査では、地表面で確認できた礎石のみを報告対象としており、報告以外にも礎石が抜き取られ、根石のみが残存していた箇所などについては礎石配置に含めていない。今年度の調査によって改めて調査対象区域では大規模な削平が行われていないことが確認できた。

参考文献

＜引用文献＞

Ⅱ章

厚沢部町史編纂委員会　1969『櫻島－厚沢部町の歩み－』
江差町史編集室　1979『江差町史』第三巻史料三　江差町
江差町史編集室　1981『江差町史』第四巻史料四（関川家文書）　江差町
江差町史編集室　1983『江差町史』第六巻通説二　江差町
菊池明　1998『南柯紀行・北国戦争概略衝鉾隊之記』新人物往来社
工業技術院地質調査所　1975『地域地質研究報告　館地域の地質』
永田富智　1991「北門史綱（前承－巻之四より巻之七）」『松前藩と松前－松前町史研究紀要－』松前町史編集室
北海道開発庁　1970『５万分の１地質図幅説明書　江差』

Ⅳ章

北海道教育委員会　1964『文化財調査概要報告書』
大場利夫　1969「北海道檜山郡厚沢部城址」『日本考古学年報17（昭和39年度）』日本考古学協会

Ⅴ章

＊章末に記載

＜その他の参考文献＞

厚沢部町教育委員会・十勝考古学研究所　1989『館城跡　遺構確認調査報告書』
厚沢部町教育委員会　1991『館城址遺構・範囲確認調査－第2・3次調査報告書－』
厚沢部町教育委員会　1991『館城址　遺構・範囲確認調査＝第2,3次発掘調査報告書＝』
厚沢部町教育委員会　2007『館城跡Ⅲ　平成17･18年度町内遺跡発掘調査事業に伴う発掘調査報告書』
厚沢部町教育委員会　2008『館城跡Ⅳ　平成19年度町内遺跡発掘調査事業に伴う発掘調査報告書』
厚沢部町教育委員会　2009『館城跡Ⅴ　平成20年度町内遺跡発掘調査事業に伴う発掘調査報告書』
大橋康二　1993『肥前陶磁』考古学ライブラリー55　ニュー・サイエンス社
大橋康二　1994『古伊万里の文様』理工学社
大橋康二　2004『世界をリードした磁器窯　肥前窯』シリーズ「遺跡を学ぶ」005　新泉社
九州近世陶磁学会　2000『九州陶磁の編年－九州近世陶磁学会10周年記念誌－』
九州近世陶磁学会　2009『江戸後期における庶民向け陶磁器の生産と流通（関東・東北・北海道編）』第19回九州近世当時学会資料
財団法人　瀬戸市埋蔵文化財センター　2002『財団法人　瀬戸市埋蔵文化財センター企画展図録　江戸時代の瀬戸窯』
財団法人　瀬戸市埋蔵文化財センター　2004『財団法人　瀬戸市埋蔵文化財センター企画展図録　江戸時代の瀬戸・美濃窯』
函館市教育委員会　2006『特別史跡五稜郭跡箱館奉行所跡発掘調査報告書』

波佐見町教育委員会　1993『波佐見町内古窯跡群調査報告書』波佐見町文化財調査報告書第４集
波佐見町教育委員会　2006『大新登窯跡』波佐見町文化財調査報告書第17集
財団法人北海道埋蔵文化財センター　1984『史跡松前藩戸切地陣屋跡－昭和５８年度発掘調査概要報告－』上磯町教育委員会
北海道文化財保護協会　1985『史跡松前藩戸切地陣屋跡－昭和59年度発掘調査概要報告－』上磯町教育委員会
北海道文化財保護協会　1986『史跡松前藩戸切地陣屋跡－昭和60年度発掘調査概要報告－』上磯町教育委員会
松前町教育委員会　2005『東山遺跡』

写 真 図 版

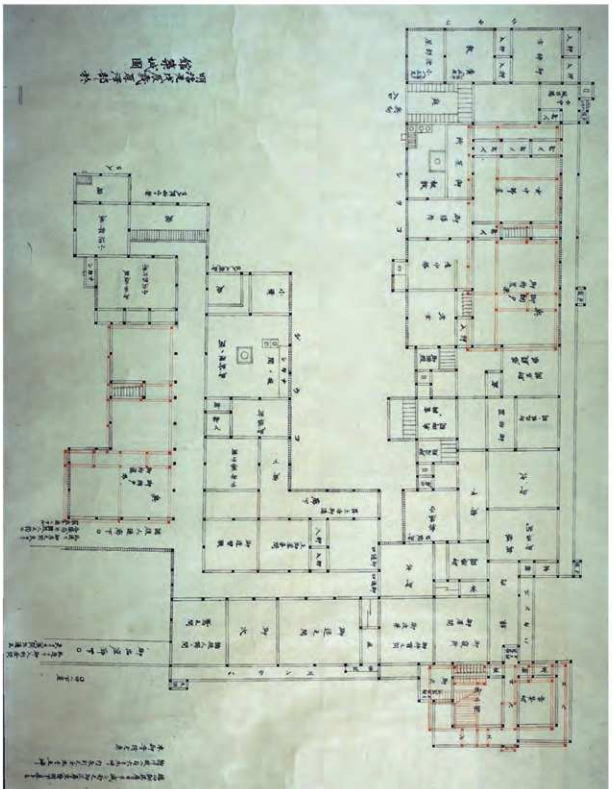


写真1　『増田家文書』「館築城圖」（厚沢部町郷土資料館所蔵）

写真２　第１調査区全景（南から）

写真３　第１調査区サブトレンチ１堀断面（東から）

写真４　第１調査区サブトレンチ５（南西から）

写真５　第１調査区サブトレンチ５堀断面旧用水路検出（南から）

写真図版４

写真６　２－１調査区全景（東から）

写真７　２－１調査区全景（西から）

写真8　2－2調査区全景（南東から）

写真9　2－2調査区西壁断面（南東から）

写真図版6

写真10　第３調査区全景（南から）

写真11　第３調査区「沢状地形」（東から）

写真12　第３調査区溝状遺構断面（東から）

写真13　平成20年度第４調査区堀・土塁・水路(西から)

写真14　平成21年度第４調査区全景(北から)

写真15　平成21年度第４調査区南側柵列検出状況(北から)

写真16　平成21年度第４調査区堀・土塁・柵列屈曲部(東から)

写真17　平成20年度第４調査区柵列柱痕断面(南から)

写真18　平成21年度第４調査区柵列断面(南東から)

写真19　第５調査区「米倉建物」礎石検出状況（南から）

写真20　第５調査区「本丸建物２」礎石検出状況（南東から）

写真21　第５調査区「本丸建物１」礎石検出状況（南から）

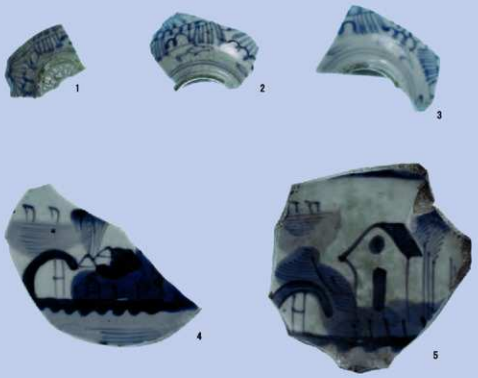


写真22　平成20年度第４調査区出土遺物

写真23　平成21年度第４調査区出土遺物

写真24　第３調査区(左)、第４調査区出土金属製品

写真25　第５調査区「米倉建物」採集遺物

写真26　第５調査区「本丸建物」採集遺物

報 告 書 抄 録

ふりがな	しせきまつまえししろあと　ふくやまじょうあと　たてじょうあと　たてじょうあと
書名	史跡松前氏城跡　福山城跡　館城跡　館城跡Ⅵ
副書名	平成21年度町内遺跡発掘調査事業に伴う発掘調査報告書
シリーズ名	厚沢部町教育委員会発掘調査報告書
シリーズ番号	第８集
編著者名	石井淳平
編集機関	厚沢部町教育委員会
所在地	〒042-1113　北海道檜山郡厚沢部町新町２３４－１
発行年月日	2010年3月31日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
たてじょうあと 館城跡	ほっかいどう ひやま 北海道檜山 ぐんあっさぶちょう 郡厚沢部町 あざしろおか 字城丘158 ほか	1363	C-03-14	41° 52′ 36″	140° 20′ 46″	20090511 ～ 20090828	2,317㎡	埋蔵文化財緊急調査事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
館城跡	城跡	幕末	堀、土塁、柵列、整地層、礎石	陶磁器、金属製品	

厚沢部町教育委員会発掘調査報告書第８集
史跡松前氏城跡　福山城跡　館城跡　館城跡Ⅵ
平成２１年度町内遺跡発掘調査事業に伴う発掘調査報告書

平成22(2010)年３月31日
編集・発行　厚沢部町教育委員会
〒043-1113　北海道檜山郡厚沢部町新町234番地の１
ＴＥＬ（0139）６４－３３１１
ＦＡＸ（0139）６４－３８２２
印　　刷　(有)ヨコノ印刷
〒043-0034　北海道檜山郡江差町字中歌町25－1
ＴＥＬ（0139）５２－０５５３
ＦＡＸ（0139）５２－３８２４